

# 門 入 中 役

局 通 弘 本 務 宗 立 佛 門 本

## は じ め に

只今、宗門では高祖七百回ご遠諱をむかえる奉賛ご奉公の一つの大目標として、宗徒増加の悲願を提唱して、各々それに邁進していることと存じます。

宗徒増加の要は、何といっても、新入信者がシツカリ育ち、一日も早く仏立信者としての自覚をわかまえるようになり、自らも教化意欲を持つ信徒に育てあげることにあります。

それには、新入信者を育てあげる役中の力が重要です。そこで今回、役中の手引書として、この小冊子の製作を試みて、役中増強の糧かてとしていたゞければと思う次第です。

内容は、仏立宗の役中としてこれぐらいは是非知っておいてもらいたいという仏立宗の教義や歴史、そして具体的なご奉公の指導方法などを、掲載したつもりです。ことに、具体的なことになりますと、地域差や寺院ごとの教育方法のちがいがあつたりして、最大公約数的な考え方を選ぶのに、かなり苦勞をしたようです。その点、多少の差位は、何とぞ御容赦の上、適宜転用して指導して頂ければありがたいと思います。

この小冊子を作るにあたり、渡辺乗戦師の勞作をもととし丸山乗真師に、特にその勞をわずらわしましたことを記して、謝意を表します。

局 通 弘 本 務 宗

局 長 指 出 日 軌

# 目次

はじめに	24
<b>仏立宗の教義</b>	
法華經	1
本門仏立宗	2
久遠本仏	3
ご本尊	5
本門八品所願	7
上行所伝	9
本因下種	11
本門事行	12
三宝	13
<b>お寺でする行事</b>	
当宗寺院の行事	14
三大會	16
お総講	17
高祖降誕會	18
彼岸とうらぼん	20
冠婚葬祭と年中行事	22
<b>修</b>	
無始已來のご文について	36
言上文	37
如説修行抄	39
南無久遠の文	41
お寺参詣	42
お講参詣	43
ご法門	44
誓願と祈願	45
<b>教化</b>	
墓と塔婆	24
教化の手順	26
入信の儀式	27
奉安の仕方	29
謗法払いについて	30
入信後のお世話	31
信行相統	32
お看經	34

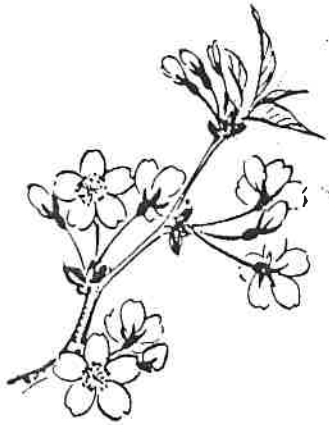
ご教歌	47
布施と供養	48
ご有志	49
ありがとうございます	50
<b>お給仕</b>	
高祖大士尊像	52
お戒壇と仏具	53
ご宝前のまわり	55
お供水	56
お仏飯	57
お供酒	58
香・華・灯明	59
たかつきと三方	62
マスクと切り火	63
おじゅず	65
<b>ご奉公の実際</b>	
役務とご奉公	67
講師・教務	68
正宗徒	69
組長と班長	70
ご披露	73
<b>将</b>	
将引	75
<b>助</b>	
事務会計について	77
社会奉仕と信徒	78
役務ご奉公の心得	79
ご奉公の戒め	81
金銭の貸借と信徒	83
現金のお盛り物	84
酒と信徒	85
役務勇退の心得	86
役務と功德	88
授級褒賞	89
<b>本山と由緒寺院</b>	
本山の由緒寺院	91
<b>その他</b>	
法号	96
本門仏立宗歌	97
仏丸	98
ご奉公の種類について	99
当宗の行事・コラム目次	100

## 法華經

法華經の原典はサンスクリット（梵語）（梵語）古代インドの公用文語）で記録されたお経で、サグ  
ルマ・プンダリーカ・スートラ（真理の蓮華の  
経典という意味）漢字では薩達磨分陀利伽蘇多  
攬（高祖開目抄による）とあて字します。三種  
の漢訳が現存しますが、インドの名僧クマラジ  
ーバ（鳩摩羅什）の訳した「妙法蓮華經」が最  
もすぐれて丁重壯麗流麗であり、天台大師は専  
らこれに依って天台宗を立て、高祖日蓮大士も  
他の二訳を参照はされましたが『羅什三蔵一人  
を除いてはいづれの人々も悞（誤）らざるはな  
し」と仰せられて、天台と同じくこれに依られ  
ました。

法華經は一部八卷二十八品から成り、前に、無  
量壽經、一巻、後に、觀普賢菩薩行法經、一巻

をつけて「法華經開結三部」と申します。当宗  
宗法第七条（所依の經典）として、「本宗は、  
妙法蓮華經開結十卷を本典とする」とあります。  
法華經は大乘經典としては短いものですが、  
最も早く外国にも知られ、仏教学者、インド哲  
学者にも広く最高の評価をうけ、インドでは広  
く流布して、最も多くの写本が作られたようで、  
ナーガールジュナ（竜樹）、ヴァスヴァンドウ  
（世親）天親などが法華經を論じ、讚歎した  
ことは日蓮大士の仰せのとおりです。



## 本門仏立宗 宗名について

『名は体を表わす』といいますが、当宗の公武の名称は、当宗がどのような宗教か、宗旨かということのすべてを餘すところなく表現しているのです。

「仏立」ということは、文字どおり、仏さまが、自ら立てられた一ということ、お祖師さまの「仏立宗とは釈迦所立の宗なる故也」との明らかなご宣言、そして「日蓮は何れの宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず」とのご主張、これを受けられた開導日扇聖人の「如来（仏さま）の御使高祖（日蓮大士）なり高祖の御使門祖（日隆聖人）なり、門祖の御使清風（開導聖人のご自称）なり。他にあることなし」との明白なお示しによって、当宗の元祖（教主）とその使者という立場のたてわけ（能所の別という）をはっきり示されています。ですから、同じ日蓮大士門下でも、日蓮宗などと名のすることは、かえってお祖師さまのご意向にそむき、また、

お寺の形にしても他派によく見られるように、釈迦仏とお祖師さまを別々にまつるようなことは大きなまちがいであります。如説修行抄に「およそ仏法を修行せんには人の言を用ふべからず、仰いで金言（お経文一仏説）をまもるべきなり」と仰せのように、純粋に正統に釈迦一仏の教をひたすらまもり信ずる、これが仏教の正統派の当然な態度なのです。これに対し、他宗は、その教主がいかになりっぱな人であろうとも、自己流な勝手な解釈で開いたものですから、開導聖人は人立宗と批判しておられます。

ただし、釈迦仏と申しても、ただの釈迦仏でないことは本門の二字が付してあることで、これは「久遠本仏」の項を見てください。そして、門祖聖人の『十二宗名』、開導聖人の『題目宗』という、教義にもとづく異名のあることも知っておいてください。

ご教歌 みほとけのお立てなされた此講は何かしらぬが利益現証

## 久遠本仏

いちがいに仏さまといっても、釈尊（釈迦如来、釈迦仏）のほかには有名な阿弥陀仏、大日如来、薬師如来などのほか、無数の仏さまが各種の経文に説かれています。しかし実際に古代インドに出現され、出家をして修行の結果、覚りを得て成道（仏陀になること）して、法（教え）を説かれた方は釈尊ただお一人です。仏教は釈尊の教えであり、お経文はその教えをお弟子が結集（集めて記録すること）したものです。釈尊以外の仏さまは、どんなにありがたく、りっぱに説かれていても、それは実在した仏さまではなく、方便（釈尊が言葉に表わせないような深くて広いお覺りの内容を、部分的に、少しでもわかるように言葉で説明すること、相手により、時と場合により、いろいろな例を用い

る）の為に説かれた仮の仏さまなのです。ですから釈迦仏のみが一切の仏さまの生みの親である唯一の仏さまであるわけですが、実はそれだけでなく、「久しく遠い昔にすでに成仏を遂げ、説法教化し、すでに多くの弟子（これが上行等の大菩薩衆）があり、此の度世に出現し、一代の教えを説きまもなく入滅をするけれども、それは汝等の信心増進の為の方便であって、実はこれから先、これまでの過去よりもさらに永く、常に生きて汝等の身近に居り、見守っており、法を説くであろう。信心強盛な者は必ず私の姿を現実に見ることができよう」と、釈尊ご自身の告白が法華経、如来寿量品第十六に念入りに説かれます。これは、他の經典には全く見られないことであり、この告白（誠諦之語）により、いままでの釈尊は歴史上の（始成という）釈尊と区別して、寿量品誠諦之語から後の釈尊を常住不滅、久遠実成釈迦如来と申し、いわば釈尊の御聖霊で、この仏さまこそ、私たちの

ご本尊として今、現在生きておわす生身釈尊なのです。まさに根本唯一の真実の仏さまですから本仏（本門の仏）と申し、当宗の元祖と仰ぐのです。（宗号の項参照）

## 仏立宗の信心相承

久遠の本仏がおたてになられた、本門仏立宗が沢山のお弟子方に引きつがれて、現在のご講有にいたる歴史を追求していくことを外相承と申します。

これに対して、内相承というものもあって、これは、歴史をとびこえて、心と心、お持ちをする正法と正法をくらべて、そこに師弟の思いを持つものです。この点でいえば、久遠の本仏上行菩薩、日蓮大士、歴代講有は、強い一本の線で結ばれます。

ご教歌 諸宗には十九出家の釈迦をしりて  
夢にもしらぬ久遠実成

外相承は、歴史の旧さ、系統の正しさの証明となり、内相承は、信仰の純化のあかしとなりますから、宗団にとって、どちらも大切なものです。

私たちは、内相承、信心相承の思いをもって、ご講有上人には、三祖にお仕えするように、お給仕をさせていただきたいものです。又、全国のお導師、お講師はご講有のご名代としてご奉公されておられるのですから、お敬いの心をもって、外護のご奉公をしてください。

## ご本尊

一般に宗教というものには必ず象徴、礼拝の対象となるものがあります。これを本尊と申します。

当宗のご本尊は文字に現された妙法五字のお題目です。紙に墨で認められ、表装をした掛軸の形が古来の基本ですが、木材に浮き彫りにされたものもあり、最近では額縁におさめた形もできています。

信者が初入信の際、はじめて奉安するご本尊は高祖日蓮大士のご真筆を、開導日扇聖人が、そっくり書写されたものを印刷にかけたもので、所属寺院の什物であって、仮りにおまつりするので、すから護持者の名前が入りません。これは「ご弘通ご本尊」と申します。

信者は早く信心増進して、終生不退転（やめない、なまけない）に護持し奉るといふ誓いを

新に、お導師にご染筆、開眼を願って拝受するのが当然の次第で、これを「護持ご本尊」と申します。いずれにしても、ご本尊はただ一幅だけを護持すればよろしいのですが、信者の安心のために

(1) 旅行などの場合にお伴いする「懐中ご本尊」  
これにはロケット形のものできています。  
(2) 家屋や店舗、工場などを新築する場合に、棟神の代りにおまつりする「棟上ご本尊」

(3) マイカーのための守り礼型のご本尊  
(4) 妊婦のための「腹帯ご本尊」

(5) 死者のための「かたびらご本尊」などがありますが、これらは、ご本尊とはいっても、ある目的に応じて現わされたもので、生身仏へのお給仕ができませんから完全なご本尊とは申せません。

ただし、(1)「懐中ご本尊」は取り出して安置すれば、礼拝・口唱行ができますから、準宗徒のご本尊と認められます。

とにかく、要はご本人の信心なのですから、わが家のご宝前さえ正しく護持して信行に怠り  
がなければ、特に必要はないのです。

大切なことですが、認められたお題目は当宗  
免許のお導師がお開眼をして、はじめてご本尊  
となるので、この儀がなければ単なる文字に過

## ご本尊の三義

ご本尊には、三つの深い意味合いがあります。  
それは、本来尊重、根本尊崇、本有尊形で、  
をつけた部分をとりだすと、いずれも本尊とい  
う文字になることに気付くでしょう。この三義  
を追求していくと、そこに、私たちの礼拝の対  
象となる真実のご本尊がうかびあがってきます。  
つまり、ご本尊は、人為的に作られたものでな  
く、過去から未来にかけて不滅の生命をもった  
あらゆるものに超絶した価値を有するものでな

ぎません。ご修復などの場合は一時お魂を抜い  
て頂き、また再開眼をして頂きます。  
ご弘通ご本尊と護持ご本尊が組(部)内に何  
幅あり、どうなっているかを知っておくこと  
は組長(部長)さんの大きな責任ですから心得  
てください。

ければなりません。

新興宗教の多くは、その成長と共に、ご本尊  
がかわっています。立正佼正会や天理教はその  
最たるものです。創価学会も自ら主張する程で  
なく、ご本尊の真疑について内部から告発され  
ている有様です。そればかりでなく、教学的に  
いえば、彼等があがめるご本尊は仏さまご在世  
の人びとを救うためのもので、末法の私たちに  
は、何の利益も得られない古色蒼然たるもので  
す。

この三義で、ほとんどの宗教のご本尊が、否  
定をされてしまうことを知ってください。

## 本門八品所顕

当宗の依り所とする経典は釈尊ご一代、一切  
経の中の唯一真実である法華経(正しくは漢訳  
妙法蓮華経一部八巻十八品)です。これを二つ  
に分けて、序品から第十四までの前半を「迹門  
」、第十五から第廿八までの後半を「本門」と  
称します。なぜ分けたのか、どう違うのかとい  
うと、迹門は釈尊がご在世の時の人々(衆生)  
が等しく成仏をするために説かれた部分ですが、  
本門では釈尊がご入滅の後の世(いわゆる無仏  
世)の人々の為に説かれた、いわばご遺言とも  
いふべき部分で、このことは私たちにあって重  
大なことなのです。

さて、滅後は三つの時代の区分けがあり、正  
法の時代というのが千年、像法の時代がさらに  
千年、この後がいわゆる末法時で、「法滅せん

とする時」と説かれるような悪世となり、仏教  
の危機です。本門は十四品、この中で、第廿三  
から終りの廿八までは正法像法時代二千年間の  
人々のための教えです。第十五から第廿二まで  
の八品こそ、末法時代、つまり日蓮大士以後の  
現代の私たちのための格別な教で、末法時代の  
人々がどうしたら法華経のお経力(ご利益)を  
頂けるかがこの本門八品に説かれているのです。  
つまり、法華経の教えは、時代によって修行  
のしかた、ご利益の頂きかたが違うのだとい  
うこと。これを誤らぬように「八品所顕」と標榜  
するのです。門祖日隆聖人の時、本迹一致とか、  
本門十四品とか、一品二半とかいうまちがった  
門派を折伏するための標語で、法華経を正しく  
学べば、当然に本門八品が結論となるのです。

本門八品はさらに、本地一経と申し、単に末  
法時代のための教えばかりでなく、全仏教のあ  
らゆる時代を通じての根元の教えであるという、  
これは世間でいわれる根本仏教よりもさらに深

い当宗教義の奥義がありますが、あまりむづかしくなりませんからここでは略します。

## 法華経の読み方

法華経は本仏お悟りの大法ですから、極めてむづかしいものです。字句の、難解さもさることですが、そのみ意をつかむ段になれば、これは信の一字で頂戴をしなければ、どうにもなりません。お導師やお講師でさえも、法華経のお話をする時は、本仏の直弟子であった上行再誕、日蓮大士のご遺文によって、進路をきめてから、勉強するのですから、くれぐれも素人の独学はさけないものです。

それでは、受持のご信者の中で、法華経を読んてみたいという人があつたら、どう指導するか。

一番良いのは、お導師に講義をしていただくことです。しかしながら、いくらお導師といつても、全部の信者に法華経講義をする訳にいきませんから、左に当宗でだされている、優れた解説書を紹介しておきます。それ等に目を通した上で、原文にあたられるよう、話をしてください。

他宗で出版をされているものなどは、論外で

「法華経講話」

― 泉 日巨著

「あなたの心に生きる」

妙法蓮華経  
― 指田日軌著

「仏立の法華経」

― 仏立学徒会編

「法華経講話」

― 石井日受著

## 上行所伝

末法時代は仏法が滅亡しかねない重大な危機であることは前項でのべましたが、仏さまがこういう時に備えて、特に本門八品を説かれ、世に出でて仏さまのお代理として法華経の教えを再興される秘蔵のお弟子を呼び出されます。これが「上行等菩薩大衆」という方々で、上行とはこの多勢の菩薩がたの導師（代表）のお名前です。この菩薩は他の経典はもちろん、法華経の中でも、第十五に仏さまのお呼びにこたえて、大地の下から現われる（從地涌出）菩薩で、そのお姿は仏さまと同じくらいりついで、威厳と慈愛にあふれた方です。

そして仏さまは、法華経の肝心要である妙法五字のお題目を、この上行菩薩に、末法時代に世に出でて弘めよと遺言されます。この仏勅

（遺命）を『当身の大事』と感得された人こそお祖師さま日蓮大士なのです。他にも空海とか法然とか道元とかの名僧も法華経を讀みはしたが、「父子天性」という、父の遺言は実子でなくては、わかるうはずはないのです。「日月の光明のよく諸の幽冥を除くが如く」とお唱えするご文は、短いけれども、上行菩薩が末法の世に出でてご弘通をされるすがたを予言し、励まし、讃えられる、如来神力品の仏様のお言葉です。

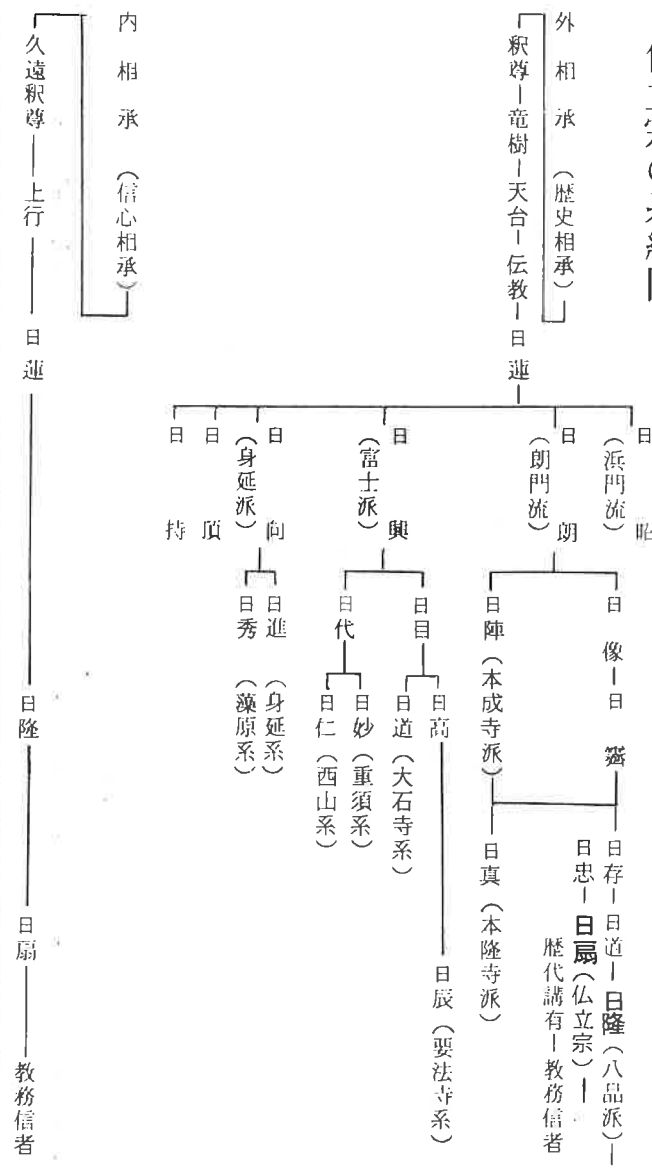
この上行所伝の四字こそ、私たち衆生と本仏とのご因縁、お題目の由来を示す、末法現代の法華経の肝要、当宗教義の中心なのです。

菩薩といえは、本門八品の後で説かれる觀世音菩薩、普賢菩薩、藥王菩薩など、他のお経にも説かれて有名ですが、この菩薩がたは、末法時代以前の正法像法二千年、上行菩薩が出現されるまでの間、前駆として上行菩薩の代理として法華経を弘め世を救う方々なのです。

以上のように、妙法五字のお題目は、この上行菩薩日蓮大士が特命全權大使として、仏さまのお代理で末法時代の私たちを救うべき大法と

してお弘めくださるということを「上行所伝」と申すのです。

### 仏立宗の系統図



### 本因下種

これは教学用語の、本因妙・下種益を合わせ略した言葉で、お題目の正体と、その働きを表わします。「本因」とは本仏の因行、つまり仏さま(本仏釈尊)ご自身のなされた菩薩行、教化折伏行のことです。仏さま御自身も、因果の道理によって、この菩薩行にはげられた結果、成仏をされたのです。このことはたいへん重要なことで、法華経寿量品第十六にはじめて説かれる、他の経文には説かれぬ尊い意味がありますから特に「妙」の字を添えて「本因妙」と申し、これが妙法五字お題目の正体です。ですから私たちが仏さまのまねをして同じ菩薩行をすれば、仏さまと同じ身の上、つまり成仏ができるわけですが、本因妙とはどんなことをかを実際に見せて手本を示してくださいのが、仏さまの特使、上行日蓮大士なのです。以上のことを説かれたのが本門八品です。(前項参照)

さて、本因妙はいわば成仏のたねですから「仏種子」とも申します。「下種」とは文字どおり、この本因妙仏種子を下す、つまり種まきをすることです。どこへまくのかというと衆生の胸の内、心の奥底です。すなわち教化して救済し、成仏させることです。ただこれだけのことではなく、下種という言葉は、化城喻品第七に説かれた仏さまと衆生とのご因縁を示す、たいへんむづかしい教学用語です。「縁なき衆生は度しがたし」といわれますが、末法時代は仏さまとの縁なき衆生で、これを救うのが上行菩薩のお役目ですから、上行日蓮大士が手本を示された本因妙、すなわち妙法五字お題目を我も唱え他にもすすめてご利益を頂くということを「下種益」と申すのです。とにかく、お題目には縁なき衆生をも助けるといふ絶大なお力があり、それを弘めたもう上行日蓮大士には、あらゆる妨害にも負けない御徳があることを意味するのです。

## 本門事行

法華經の修行に二つの方法があります。「事行」とは理行に対する言葉で、理行とは「覚りをひらくために思いをこらす」ということ、これに対して事行というのは「仏の教えを信じて、態度や行いでやってみせる」ことです。「思いをこらす」ことは自分だけの世界に閉じこもらなくてはできません。

お祖師さまの学ばれた比叡山の天台宗では、修行僧たちは深い山の中のおちこちで、覚りを開くために、じつと坐って思いをこらし考えこんでいたのです。ところがお祖師さまは、こんな事をしていても、現実に苦しんでいる巷の人々を救うことはできない。生活に追われている人々は、一人きりでジツと坐りこんで思いをこらすことなどできるわけがない。お経文には『

## 三 宝

仏教には、ちようど私たちの生活の衣・食・住の三要素のように、どれ一つ欠けても成り立たない三つの要素があつて、これを「三宝」と申します。尊貴なるもの、ありがたいもの、護り持つべきものという意味で「宝」というのです。それは「仏宝」「法宝」「僧宝」の三つです。

仏宝とは釈尊、法宝とはその教え（教法）僧宝とは僧伽（サンガという梵語で、和合同行衆と訳する）という仏弟子の集り、教団のことです。

仏さまのご在世から、三帰依または帰依三宝といつて、お弟子も在家信者も「仏に帰依し奉る、法に帰依し奉る、僧伽に帰依し奉る」と誓言をとなえたのです。帰依することは同時に「

斯人行世間』と説かれてある。これは人々の中にとびこんで、人々と交り、苦楽を共にしながら、法華經の肝心要であるお題目を我も唱え他人にもすすめてゆく口唱折伏の修行こそ、末法時代の法華經修行として上行菩薩が仏さまから授けられた、唯一つの法なのだーとお覚りになり、お手本となつて実際にやってみせてくだされました。それをそっくりまねをして引継いでゆく、これがつまり事行なのです。

この事は法華經も末法時代のための教えである本門八品にのみ説かれていたのですから「本門事行」と申すのです。末法時代は天台流の迹門理行ではダメだというお祖師さまの宗旨をはつきりさせるための標語なのです。

護持」することで、表裏一体です。これは根本的な「戒」として、三帰戒受持ともいいます。

仏さまご入滅後は、仏宝と法宝は事実上は合体することになります。三宝の義（意味）は失われることなく、現在でも生きて用いられます。

当宗では本門八品の教義により、狭い意味ではご本尊を根本三宝一体として、仏は久遠本仏、法は妙法五字、僧は上行日蓮大士のお魂として仰ぎます。帰依はいつそう強い意味の「南無」（梵語ナマス、帰命と訳す）となり、和合同行は「異体同心」という言葉になります。三帰戒は本門円戒、「むしいらい」のご文、さらに「南〇經」の一言に含めます。法華經では三宝護持は専ら「持經・供養」として説かれています。つまり「供養」は信者のつとめ（戒）なのだといふことを知ってください。（別項参照）

## 当宗寺院の行事 お寺

当宗のお寺は、おてらとはいいますが他宗とは大きな違いがあります。

他宗のお寺は死んだ人が集まるため（ノ）のもので、暗くて線香くさく陰気で、飾り物や道具が大部分を占めています。亡魂の追善や、坊さんだけの法要儀式ならば、人の坐る場所はありません。

これに対し当宗のお寺は、生きている人が集まる殿堂ですから簡素で、道具や飾り物は少なく、人が一人でも多く坐れるように広々として明るいのです。当宗でも一応は仏教の習慣で寺院、お寺と呼んでいますが、実はお経文によれば「道場」というのです。本山宥清寺は根本道場という標札がかかっています。

道場とは、修行のために人々が通い集まる所です。戦前、宗独立するまでは「親会場」と呼称されていました。

他宗他派の寺院では、仏さま、宗祖をはじめ不動、観音、帝釈天、妙見……などそれぞれ別にお堂を建ててまつたりしますから、境内のあちこちにお堂があります。

当宗は根本三宝である妙法五字のご本尊ただ一幅と、上行日蓮大士尊像とを一体として奉安するだけですから、信徒自宅のご宝前と全く同じ形で、ただ大きさが違うだけです。

では、自宅のご宝前を拜んでいけばお寺へ参らなくてもよいかというと、なるほどお経文には妙法五字のご本尊をまつた場所は、どこであるかと「即是道場」と説かれています。また「往詣仏所」「来至道場」つまり仏さまのもとに参るべしとも説かれていいます。この点を開導聖人は「道場に能所あり」とお示しです。能所とは本と末、本来と臨時の別のことで

す。つまり、お寺は所属信徒のご有志によって建立された公物で、信徒が随時参詣するための本来の道場、仏祖諸天の常住し常説法したもう道場であるのに対し、信徒自宅は元来私有物であり、住居ですから、お講席の場合は仏祖諸天が来臨して道場となりますが、いつでも誰でも自由にお参りはできないという違いがあり、

また、お寺は参詣する所、自宅ご宝前はお給仕をさせていただく場所という違いもあるわけで、両々相待って、はじめて信行を全うするわけです。ですから、何かというとお寺参詣、特に朝参詣をすすめるのは、先ずお寺、そしてわが家のご宝前という本来のたてわけ（能所の別）をまなぶためなのです。

## 七・五・三の祝

七五三の祝は、古くからある習慣で、近年ますます盛んになってきました。ところが、それと同時に、親の見栄くらべも派手になって、子を持つ親の苦しみにさえなっています。当宗の場合は、世間の人たちのように、由来も判らなくなつた故事によつて、七五三をするのでなく、これを機会に、ご宝前に無事養育成長のお礼をあげ、法灯相続のご祈願をしていただくのです。

子供が恥をかかない程度の服装にとどめたいものです。

受持信者の中には、謗法の寺院や神社に参詣をして、平気な人がいますが、良く折伏をしてあげたいものです。

毎年のように、ご近所の人をさそつて、当宗寺院に参詣させ、ふれあいと教化成就のご利益をいただいている人がいます。役中は、九月十月ともなれば、受持信者の子供の顔がまぶたにうかんでくるようになります。初参り（通常お宮参りと称している）も同様です。

## 三 大 会

三大会とは、三つの大きなお会式という意味で、当宗寺院における最も重要な行事の一つです。

先づ、第一は、高祖会で、久遠の本仏の清く正しい信心を末法に移された日蓮聖人の報恩のために行なわれるものです。以下就れも同様に、祥月ご命日は本山宥清寺で、ご講有の総導師のもと、全国の教講が、当番制で、お会式を奉修させていただく関係から、各寺院においては、祥月ご命日の前後の日曜日が選ばれるのが普通です。

第二は、門祖会といつて、高祖日蓮聖人ご滅後百余年にお出ましになり、本門八品の正義をますます輝かされた日隆聖人の報恩のために行なわれるものです。

第三は、開導会で、日隆聖人ご滅後四百三十余年を経て、ご生誕になり、法義を正し、宗風をますます昂揚された日扇聖人の報恩のために行なわれるものです。

この三方のご出現がなければ、日蓮聖人のみ教えは、似ても似つかぬ否んだものとなったことは想像にかたくありません。いや、正しい仏教は、この閻浮提から永遠に姿を消してしまうところでした。紙数の関係から、三祖のご事績を紹介することができません。

そこで、コラムの中に、当宗の先達によって作られた三祖の讃仰歌をのせておきますので、良く読んでください。

役中として、最も心すべき点は、三大会はご利益のいただける正しいご信心をさせていただいている私たちが、喜びの心で奉修するもので、極端な言い方をすれば、信者が集合するのに最も便利なお寺を開放していただく位のつもりで、諸事積極的にご奉公をしなければなりません。

## お総講 (ご修行)

お総講というのは、ご信者が願主となつてお寺でお講をすることです。

お寺参詣の処で書いたとおり「須弥山に近づく鳥は、金色にかがやく」といわれる位、お寺に近づくだけで、はかりしれないお陰をこうむることが出来ます。

ましてや信者一同が願主となつて、真心をこめてお講をつとめさせていただくのですから、お総講に参詣をすれば、大変なご利益をいただけることが判るでしょう。

それでは、どのようなお総講があるかといいますと、

1. 月初め祈願総講 (お寺によって呼称は様様です。) 毎月一日に、その月一ヶ月のこ

とをご祈願します。お総講に参詣し、前月無事に過ごせたお礼、当月無事に過せるお願い等のご祈願をしてください。

2. 三祖のご命日総講

三祖 (三大会の項参照) のご命日に報恩のためつとめさせていただくお総講です。

毎月十三日 日蓮聖人

十七日 日扇上人

二十五日 日隆聖人

私達が、このありがたい信心をさせて頂けるのも、三祖のおかげです。謹んで起塔供養をさせていただきます。

3. 先師上人のご命日総講

各寺院には、その寺院に功績のあった、先師上人方が沢山おいでになられます。遺徳をしのび、報恩のためつとめさせていただきます。お総講です。

4. 教養会お総講

仏立壮年会、仏立婦人会、仏立青年会、仏立薫化会、仏立スカウト連絡会等の、会員が願主となつてさせていただくお総講です。教養各会の主旨にしたがつてつとめさせていただきます。

# 高祖降誕会（蓮華まつり）

「花まつり」との関係

4月8日は「花祭り」、釈尊のお誕生を祝う、仏教徒の定例とする盛大なお祭りです。幼児の姿をした釈尊の像は、右手を挙げて天を指し、左手を下げて大地を指して、天上天下唯我独尊ということを示しているといわれます。釈尊は仏教の教主、そのご降誕を祝うことは人情としては当然のこと、他の宗教でも、特にキリスト教徒のクリスマスはいうまでもありません。ところが日蓮大士門下、特に当宗では花祭りの催しはせず、釈尊の降誕については格別に重要視しないようにみえます。私たちも仏教徒、特に釈尊出世の本懐とする宗旨として不審に思う人もあります。

それは、釈尊の唯一眞実、法華経本門の教えを守るからなのです。釈尊は法華経の中で、本身である久遠本仏釈迦如来として（其の項参照）

生まれたり入滅したりすることなく、いつもこの世に生きていますことを説かれて、実在の釈尊の身の上と久遠の本身とを区別されて、現実の釈尊には執着してはならないと戒められたのです。このお示しに随い当宗信徒は、今も生きています本仏をご本尊としますからこそ、現証のご利益が頂けるわけです。この本仏には、ご誕生ということが考えられませんから、花祭りは催さないし、世間の花祭りに参加もしません。その代りに、仏立信徒は高祖日蓮大士のご誕生をお祝いして「降誕会」「蓮華祭り」を盛大に催します。

この事は、やはり法華経の中に、上行菩薩が本仏のお使として、現実に日蓮大士としてこの世に生れたまい、お題目を弘められること、そのお徳とご奉公を予言されているところから、2月16日のお誕生の日をお祝いして、10月13日のお会式に準じて日蓮大士へのご報恩の思いを新たにしますので。

## 三大会の項参照（その一）

### 日蓮大士の歌

- 一、水汪洋と限りなく  
大涛砕けて打ち寄する  
東海の浜小濼わたり  
日蓮大士出でませり
- 二、時維れ末法濁世の代  
仏勅をうけ我国に  
鎌倉武士の心胆をさえ  
寒からしめて世にぞ立つ
- 三、経々渡りて七百年  
蘭菊の美を競えども  
もと一仏のお悟なるを  
などか二三のある可や
- 四、不審に閉すとばりをば  
明けて帰趨を定めんと  
比叡園城天王寺より  
高野の峰や法隆寺
- 五、神道歌道の奥義まで  
究めつくして妙法の  
燦たる光認め給いて  
久遠の思い胸に充つ
- 六、龍蛇雲雨に乗じては  
既に地中のものならず  
仏の真意知たりし身の  
など世の常の人ならん
- 七、万河逆捲き潮湧き  
天柱砕け地軸裂く  
あな勇の獅子吼に見よや  
末法下種の大導師
- 八、況滅度後の金言は  
其ま茲に顕われて  
名越の夜襲はた小松原  
伊東の島も法の為め
- 九、首の座たりし龍の口  
佐渡の流罪の雪風  
艱苦はいよ、積ると雖  
破邪の太刀風吹きつる
- 十、元冠、十萬意にとめぬ  
期者彼岸の時宗も  
逆意を曲げて帰伏はせしが  
国諫遂に容れられず
- 十一、刀杖瓦石何かある  
罵詈訛口も何のその  
大難到るその度毎に  
法は四海に輝きぬ
- 十二、さはいえ従果向因の  
有為の此身をいかにせん  
末を望めば尚留かなり  
滅後の策計なからめや
- 十三、げに幽水の山の中  
廿余年の逆化をば  
其ま、遠く万代かけて  
戦闘曲と遺しつゝ
- 十四、爰に初めて一代の  
化導の始終備われば  
使命終えたり本仏在ます  
都へいざと帰り行く
- 十五、弘安五年秋の末  
南閩浮の本国土  
天地も揺ぐ悲哀に充て  
師の滅度をぞ伝えぬ

# 彼岸とうらぼん

「彼岸会」は日本仏教の行事で、宗派を問わず平安時代から始まった、春分と秋分の日にいう大法要です。

彼岸とは涅槃という安らぎの境地、つまり仏さまの浄土を指し、これに対し私たちの居るのは「此岸」で、煩惱に迷う凡夫の世界です。菩提心（信心）を起して此岸から「生死の苦海」を渡って彼岸に到ることを「到彼岸」（「度」ともいう）と申します。彼岸会は昼（生を表わす）と夜（死を表わす）の長さが等しくなる春分と秋分の日を、仏の覚りである中道にかけて、到彼岸の決心を堅め、仏菩薩の加護を祈るのです。

彼岸会が本来の意味を失って追善と墓参りになったのはおそらく徳川時代からのことでしょう

う。

「うらぼん」は于蘭盆と書き、梵語のウランバナ、倒懸と訳し、さかさにつるされるような苦しみーという意味、つまり悪道（地獄・餓鬼・畜生）に落ちた状態のことで、このみじめな亡者への追善回向のため安居（僧たちが外出を禁じて禪定を修行する、4月15日から7月15日までの3か月間のこと）の終る7月15日に大がかりな三宝への供養をする儀が「うらぼん会」といわれます。

また、于蘭盆経に、有名な仏弟子目連尊者の母が、死後餓鬼道におちて苦しんでいるのを救うために仏さまの教えに従い7月15日に僧たちに追善供養をしたーとの故事によって「施餓飢会」と結びついた行事になっています。施 鬼

世間では一般に彼岸もうらぼんも、墓参りや先祖追善の時として、各宗派では、この時とば

かり壇家まわりや法要が盛んになります。

当宗でも世情にに応じて総回向などが行われませんが、おなじ追善回向でも彼岸は報恩と敬慕の思い、うらぼんは慈悲と哀れみの思いです。しかし当宗の主義は現在生きていく意味をかみしめ、各々が信行増進ご奉公成就を期するのが正意です。ですから日頃お唱えする『今

身より仏身に到るまで持ち奉る』という「むしいらい」のご文は到彼岸の文とも言えます。また『法界群靈離苦得益佛果菩提』のご文は、うらぼんのご文とも言え、つまり年中行事ではなく、常日頃心がける日々行事であり、この意味で「常盆常彼岸」という標語があることを忘れてはならないのです。

## 三大会の項参照

門祖様

(その二)

三、存道兩師にみちびかれ

一、梅花ほころぶ春ならば  
思い出します門祖様  
至徳二年の十月に  
戦乱の世の救いとて  
あらわれ出でた大丈夫

破邪顕正の御学問  
磨く鏡の奥底に  
みきわめられし正義とは  
八品所頭の御題目

六、梅花ほころぶ春ならば  
思い出します門祖様  
寛正五年春二月

二、天子をさえも追いたてて  
臣下がたてた国ならば  
守護の諸天に捨てられて  
はびこるものは謗法の  
高祖にそむく一致流

四、獅子身中の虫ならば  
同門の士も許さじと  
一致をしたう月明の  
面を推く折伏は  
声もいさまし唱題行

七、若しこの君のましまさば  
清き流れを誰かまた  
くみて伝えん諸人に  
いざ御会式のたびごとに  
讃えまつらん心から

五、弘道の新地もとめられ  
京に興せし大堂宇（本能寺）

## 冠婚葬祭と年中行事

葬儀は申すまでもなく、それこそゆりかごから墓場までの世間の習慣による慶祝行事は当宗寺院でも行われます。

誕生後30日から40日目あたりに行く、いわゆる「おみや参り」は「道場初参詣」といいます。「七・五・三」は「無事養育成長御礼」などと称します。

「成人式」も「無事成人御礼」です。これは国定行事ですから、市町村などで非宗教的に催される場合は出席してよいのです。

「結婚式」もお寺ですべきです。やむを得ず式場である場合も、神前の儀を省くように交渉してみることで。これは早く、結納のときから念を入れるべきことです。

これらの外の慶事もみな「御礼言上」のお看

経ですみます。

「地鎮式」「上棟式」など、これに類する行事も、現場に懐中ご本尊を奉安して教務・講師によるお看経で行われます。

次に「正月」「節分」「節句」や「氏神祭礼」また「クリスマス」など、いずれも祭儀やまじないに由来する行事ですから、うっかりすると謗法になります。しかし祭りやまじないの意識はなくなり、娯楽や遊戯になってしまっているものもあります。やはり地域的な習俗によっても大きな違いがありますから、信徒の対応の仕方も、お導師の判断により多少の相違はありましょう。

そこで、ある大都市の例をあげます。

①「正月」の鏡餅はご宝前だけに供える。

門松、しめ飾りは、神のシンボルである輪飾りやごへいを取り除く。

②「節分」の豆まきはしない。

③「節句」のひな人形、五月人形、鯉のぼりな

ど飾ってもよいが、供え物をしてはいけない。ひし餅、かしわ餅、白酒など、節句の供え物のご宝前にお供えする。

④「祭礼」について、現代は「氏子」の意味は全く失われ、町会などが主催するので、お祭り・ちよう・ちんはつるしても、ごへいは取り除

く。子供にみこしはかつがせない。寄附は神社に納めるのでなく、当事者への花代として出し、名前を掲げないよう断る。

⑤「七夕」や「クリスマス・ツリー」は飾って楽しむのはよいが、神のシンボル（十字架など）は取り除く。

## 仏前結婚

本門の本尊のみ前で、人生の厳肅な第一歩をふみだすことは、永い夫婦生活の中に、どれほど重大な影響を与えるか凶り知ることができません。

信者の子弟は、すすんでお寺で結婚式をあげたいものです。しかしながら、商業的に演出をこらした結婚式場にくらべれば、お寺はなんといつでも地味ですし、処によっては、披露宴を別に持たなければならなかったりして、相当の

信者でも、お寺をさける傾向があるようです。そこで、役中として、若し受持信者の中に、適齢期の男女がいたら、常日ごろから、ご法様のご守護をいただきながら、結婚式をさせていただく幸せをお話してあげましょう。

又、信心決定をしてお寺を選ぶカップルがあったら、諸事こころくばりして、手作りの良さを喜んでいただけるよう、ご奉公に励みたいものです。

# 墓と塔婆

妄語にまどわされてはなりません。

開導聖人のころの教化・入信は「転壇入信」といって、謗法払いはもちろん、これまでの先祖の墓のある他宗寺院と縁を切り、お骨を引きあげて入信するという徹底したやり方を原則としましたから、当宗寺院にも納骨堂、そして墓

各宗派を通じて、墓石や納骨堂に「塔婆」を立てる習慣があります。塔婆とは梵語ストウーパの音訳で、釈尊ご入滅の後、仏舍利（ご遺骨）を納め祭る塔を方々に建てて礼拝し、供養をしたのが起源です。

当宗の教義から申せば経曰『舍利（遺骨）をも安置することを須いじ』と説かれてあり、遺骨に靈魂が宿っているのではなく、単なる故人のシンボルにすぎないわけですが、人情からはもちろん、日本では法律によって、遺骨は勝手に処分できず、必ず靈園か寺院に埋葬しなければなりませんから墓も必要となります。

当宗のとうばは法華経（法師品、特に神力品）の『起塔供養』の教えによるものでお題目をまつり、生身本仏にご供養し、その功德を志す精霊に向向するのです。

しかし墓石の形や方位などは自由で、経曰「一切無障礙」です。墓相とかいう、墓石の材質や配置、方位などをいちいち意味つけて吉凶を論ずる連中がいますが、信者はこういう迷信・

また塔婆は人目にふれるところに意義があり、お祖師さまには、塔婆にふれて吹いた風にあたれば魚や虫の類も苦をのがれる—という意味の仰せがあります。

## 三大会の項参照(その三)

### 日扇聖人讃歌

- 一、清滝川の清き瀬も  
青葉若葉に五月雨の  
降りしく頃は濁るとよ  
流れもとめて汲めや人
- 二、久遠の姿容たたえつつ  
驚峰の浄水清くとも  
流れは遥か末法の  
濁世となればはかなけれ
- 三、げに法燈をたづぬれば  
六百年の祖の滅後  
開基寂して四百歳  
濁り果てたる法の水
- 四、かかる現世を嘆きつつ  
濁る法水せき分けて  
清き流れにかえさんと  
世に出でませし吾講祖
- 五、諸宗の蘊奥傾けて  
仏の真意見定めつ  
宗学深くたどり入り  
祖師の御魂や受け給う
- 六、豁然として悟られし  
我尊師には威靈満ち  
祖師の教えをそのままに  
肝要をのみ説かれたる
- 七、説く法門の浄ければ  
靈験いよよあらたかに  
生ける仏を人は見つ  
実の法を今ぞ知る
- 八、況滅度後の金言は  
法ヶ行者が身の誉れ  
牢獄三度ところをば  
八度追われし法の難
- 九、眠る人心さまさんと  
折伏逆化怠らず  
毒鼓の声をはり上げて  
三十余年の不転行
- 十、いで革新の旗色を  
仏立講と名づけつつ  
華洛の街に木門の  
火柱樹てし雄々しさよ



## 教化の手順

① 正法帰入のご祈願 教化成就はご祈願から始まる。ご祈願はただ希望するだけではありません。成就するまでの努力をお誓いし、ご宝前のお力添えを頂くのです。正法帰入のご祈願をしたと同時に下種結縁（実際にすすめる足と口のご奉公）をしなくてはなりません。

② 下種結縁 信心をしない人でも、皆仏性という信心ごころを必ず持っているのです。あなたがご自分の体験を語り、ご法門で聞いた事を伝え、ご信心のありがたさを話す時、その人の信仰心がだんだん目ざめてくるのです。それを一度ならず、二度三度とくりかえす根氣、大放光、仏立新聞などをみせたり、工夫をこらす慈悲、いやな顔をされても、なげだしたり怒ったりしない負けん気以上三つで必ずお祖師さまのお力添えで成就できることを確信してください。

③ ご本尊奉安・授戒の儀式 入信書に調印したら、なるべく早くご本尊奉安をします。好事

## 入信の儀式

入信の際のご本尊奉安は「法華経本門円戒授与」の儀式です。それは如来神力品第廿一に説かれたことで本仏（釈尊）より上行菩薩（日蓮大士）に要法（お題目）を口うつしに伝授され、「一心に受持して説の如く修行せよ」との仏勅（仏のご命令）があり、これが「本門円戒」の授与ということです。

そもそも受戒（戒を授与されること。戒を持つことを誓うこと）ということは、釈尊のお弟子となる場合のけじめの儀式です。ですから入信ということとは、受戒に外なりません。とにかく、「生れかわって、仏弟子となる」ということで、このように深いいわれのある厳かなものだということを心得てください。

① まず奉安の日時は、できるだけ早く、気が

魔多しといって、とかく邪魔が入りやすいものですから。奉安はご本尊のお敬いが大切、恭しく丁寧に、ご本尊は生きてましますみ仏であることを態度に示して教えることが大事。そして「むしいらい」のご文をくぎりずつ口授して、お看経のあと「今日ただ今から、み仏の身近にお仕えする仏立信徒として、生れかわったのです」という意味を厳かに話してあげてください。（ここはお講師にお願いしてよい）これが仏立宗授戒の儀式です。

④ 参詣符引 ご本尊奉安がすみ、ご宝前のお給仕と朝夕のおつとめを教えるとともに、お寺とお講席への参詣をすすめます。「これが最初の信者のつとめ修行の第一歩」という意味を強調してください。ひとりで参詣ができるようになれば育成ご奉公の第一段階で、ここまで教化親さんがめんどうを見て、はじめて本當の教化一戸成就とお祖師さまのお認めがいただけるわけです。

かわらぬうちが大切です。善は急げですから、時によっては部長（組長）さん（あるいは指名された役中さん）が奉安して、後刻お講師の確認助行をうけます。

なお、地方の場合は、（入信後の所属の如何にかかわらず）最寄りの寺院のお講師にお願いしても、立会っていただけるはずですよ。

② 奉安の日までに謗法払いをしておく必要があります。個室のある場合は、奉安する部屋だけでも払い清め、場所をきめておくことが大切です。先方へ着いてから、サテ、どこへおまつりしましょうかーではまずいのです。

③ 奉安のお給仕は、少しオーバーになるくらいに、ご本尊に対するお敬いを態度で表わし、壮厳なふんい気をつくり出すことが大切です。

④ お看経のはじまる時、入信願主は導師のすぐ後に、教化親は付添って坐り、（おじゆずがあれば正しく手にかけてあげる）

導師は受戒の誓文である「むしいらい」を六

句ぐらいに句切って言上し、教化親の口添えて入信願主にはつきりと復唱させます。

第二段「によらいめつ」は、『仏立要集』の用意があれば、唱えられなくても、黙読させるようにします。

勸請文に次いで奉安の言上文は、

『時これ昭和54年○月○日、願主○○、○○の教化により、本門仏立宗に入信し、一切の穢（え）を払い、法華経本門上行所伝のご本尊を奉安し、本門円戒を授与し○寺○教区○部○班所属の信徒となる。三宝諸尊知見照覧感応道交哀愍納受。』

願わくは願主○○家内の面々信行増進心中諸願決定成就円満一切無障礙。

教化親○○、所属の班長○○、育成ご奉公成就なさしめ給え感応道交哀愍納受。

別して言上し奉る、奉安給仕中はずの不敬を慎んで懺悔し奉る哀愍納受。○○家先祖代々の諸靈魂妙法経力追善菩提』（最も簡単な一例）

## 奉安の仕方（ご本尊）

ご本尊の奉安は部長（組長）の大きなご奉公です。お講師（教務）がなさる場合もあります。部長さんで、新しく不馴れの方のため、ご本尊の奉安について、左のことを心得てください。

ご本尊のお伴は、専用の「奉持函」のない場合は、清潔なボール箱でもやむを得ませんが、中がたたくようではまずいのです。フロシキは結ばずにくるむようにして、胸に抱くようにして捧げもちます。ですから、他に大きな荷物など持つことはさけてください。

ご本尊の奉安には「輪釘」（ご本尊をかけるかぎ形のねじ釘）と画鋏と半紙を用意してください。掛軸型のご本尊には「掛け紐」と「くくり紐」と二本の紐がついていますが、必ず「掛け紐」を輪釘に掛け、「くくり紐」は背面に垂ら

お看経は15〜20分、終りの「むしいらい」の前に、導師がご宝前を背にして、願主と対面し、『今日ただ今から、あなたは仏教の唯一真実、本門仏立宗の信徒として受戒されました。このご本尊を生きています。仏様として信仰し、お仕えし、教化親○さん、班長の○さん、部長（組長）の○さんのお手ついで、教えのとおりすなおに信心修行して、はやく現証をいただいでください』と言葉短かく激励し、班長さんを紹介し、そのまま終りの「むしいらい」をお唱えます。



せて奉安します。「くくり紐」で吊り下げるような奉安はいけません。やむを得ず、紐で吊らねばならない場合は別の新しい紐か、または半紙を細く折ってかけ紐に通します。小形のご本尊でも直接に画鋏で止めてはいけません。やむを得ず画鋏を用いる場合は、半紙を細く折ってかけ紐に通し、その半紙を画鋏二本で止めるようにしてください。

要するに、紙きれを壁にはる為の画鋏や、建築用のくぎを直接に用いるのはご本尊の壮嚴を損うからです。ご本尊の下軸の両端は、半紙を巾4ミリ程度に三つ折りにして画鋏で止めてください。小型のご本尊の巻きぐせを無理にのばしたりしてはいけません。切火をうつ場合にご本尊自体に切火をすることは無用です。ご注意ください。

## 謗法払いについて

日蓮大士のお書きになられた本尊問答抄に「法華経は釈尊の父母。諸仏の眼目なり。釈迦大日総じて十方の諸仏は法華経より出生し給へり。故に今、能生を以て本尊とするなり」と説かれてあります。ここにいう「能生」という言葉は、「所生」に対するもので、能生とは「生みだすもの」、所生とは「生れてきたもの」という意味の教学用語です。これだけの事が判ってから、右のお言葉をもう一度読みなおしてください。

私たちが信じて唱える本門法華経の「南無妙法蓮華経」の本尊は、良く生みだすもので、釈迦牟尼仏にせよ、大日如来にせよ、一切の諸仏諸菩薩は、すべて「妙法蓮華経」から生みだされてきたものということが判るでしょう。

生みだしたものと、生みだされたものくらべて優劣を論ずる程愚かなことはありません。

しかも法華経を良く読ましていただくと、法華経以外の諸経典や、それぞれの仏、菩薩方が

誕生された背景が良く判ります。釈尊は終始一貫、法華経で人々をお救いになられたかったので、人々に法華経を悟る力がなかったので、やむを得ず方便の仏や教えを説かれて、根気よく衆生を導びかれたというのです。

ですから、真実の教えである「法華経」が説かれた今となつては、こうしたものを、そのままに放置しておいてはなりません。元の一法におもどしするのです。これを謗法払いといいますが、謗法払いというと、何か排他的なことのよに考える人がいますが、真実は、神々や仏を、その本来あるべき場所であるお題目の中にお帰して、最高の敬意を表することですから、この点を忘れてはなりません。

もしも、班内の信者や新教化の家庭に他宗の本尊や守り礼等があったら、この文章を良く読んであげ、くれぐれも相手に不快の念を与えないよう丁寧にとりあつかつて、お寺かお講師のところにお持ちするようにしましょう。

## 入信後のお世話

ご信者の中には、有難いご法であるとか心から随喜して入信した人もいます。半信半疑で入る人もあるはずですし、付合い程度で入る人もあるかもしれません。それ等雑多な人達のもそれぞれよい処を助成し、悪い処を折伏して少しでも信心が深まるよう指導するのを育成といひます。元々教化と育成は別々のものではなく、育成を忘れた教化は教化ではないとさえいえるのですが、ともすると、派手な教化に力がいり、地味な育成が後手にまわるのは淋しいことです。

さて、よい処を助成し、悪い処を折伏していくという事は、仲々むづかしいことです。それには、相手の環境を知ること、大切なことですが、先づ、その心根を知る事が更に大切です。こちらの心と相手の心とを交わらせることが必要で心と心が通じないようでは、相手に、こ

ちらの考えていることを理解させることはできません。

話しを通じあい、こちらで考えていることを、少しづつでも実行にうつしてもらうことが育成に自然につながっていくのです。

ある役中は、教化ができること、先づ最初の一週間、毎日お助行をするとのこと。

このお助行の間に、相手の信用を得、さらに育成に必要なあらゆることを調べさせていただくのです。この一週間助行を教化親の義務として、教えているお寺もあります。

又、ある役中は、同じように一週間、教化子の先祖代々の回向をしています。自分の力ばかりでなく、正法帰入の喜びを、先祖方にも喜んでいただいて、陰から信心相続の応援をしていただくというのでしょうか。

いずれにしても、教化成就という大果報をいただいたのですから、人力の及ぶかぎりの研究工夫をして教化子の育成を心がけたいものです。

## 信行相統

心ある信者の心配することに信行相統（法灯ほっとう相統）があります。ご教歌に「本門仏立宗」と題されて、

『妙法は信心をもて相統し、御利益をもて人をたすくる』

とお示しますが、ご弘通とは「相統」という縦の線と「教化」という横の面とで永統発展しなければなりません。

相統はゆりかご時代から心がけるべきです。

赤ちゃんは、まだ目がみえないうちでも、耳は鋭敏なのです。つとめて赤ちゃんにお題目口唱の声、拍子木の音をきかせるべきです。子守歌もお題目というくらいに……。口唱のリズムは赤ちゃんの心臓の鼓動のリズムに合わせる（ちよつとむずかしいことですが）と、自然の理に

かない、快感と安心を与えたいわれます（最近の学説）

ご宝前への深々としたおじぎ、お敬いは、幼児のころは、親がすれば必ずまねをしておぼえるものです。

お菓子など買ってきた時『まずののさまにあげてから。』『いっしょに拜んでから。』という習慣をつけます。

経机やご宝前のお道具にさわらせない、おもちゃにさせない—これはきびしくしつけるべきです。うちにはお父さんよりもエライののさまがいらっしゃる—ということを親がみずから態度で教えることです。

物心つくころになれば、友達とのトラブルや学業成績のことなど、いろいろの問題をかかえるようになりませんが、『ご法さまにうかがってみよう』『お願いしてみよう』と、何かにつけ「祈願」ということを教えます。

x

こうしてまず10才くらいまでに相統の基礎はできあがります。

基礎ができていれば、中学後年から高校時代の最もむずかしい時期も、なまいきなことを言っつて一時は離れるようにみえても、戻ってくることを信じ、あまり口やかましく言わない方がいいのです。

相統を含めて家庭内教化は、なんといつても態度で示すことが大切です。現証布教です。ですから家庭の話題に信者仲間の悪口やかかげ口、ご奉公上のぐちをこぼすことは禁物です。

ちなみに、結婚について開導聖人のころは、世間人（謗法人）との縁組みは謗法—というほどのきびしいお戒めがありますが、恋愛結婚自由自在の今日では、結納の折にでも、先方にはつきり『自分だけのご本尊をまつり、仏立信仰を続ける』—ということを了解させておかないと、事後では話しにくくなります。信教の自由は基本的人権として憲法の定めるところですから、

この点を理解できないような相手では先が思いやられます。

ほしがっている物を買ってやるのも、奮発して大ごちそうを作るのも、13日、17日、25日：—というような当宗由緒の日を選んで『今日は○の日だから』—という意義付けをするなどもひとつのアイデアです。

要するに『意志あるところ道あり』で、創意と工夫がものをいいます。



## お 看 經

お題目の口唱は「常々の口ずさみ」とて、行住坐臥（立っても坐っても、歩きながらも寝ながらも）にお唱えをするのが結構ですが、やはり正式にご宝前に正座し、お灯明をあげ香をたき、儀式として口唱行をすることを「お看經」と申します。これで「本門のご本尊に、本門のお題目を唱える、そこが本門の戒壇となり、三箇之中一大秘法の受持（これはむずかしいことですが、ここでは言葉だけにします）の儀がととのうのです。

朝に一本、夕に一本のお看經は「ご法味」と申す、ご法様へのお食事をさしあげるご供養、お給仕の行ですから、欠かしてはならないお勤め（勤行）です。

お看經のマナーとして、

- ① 正しくご本尊の正面に正座して、背柱と頭をまっすぐに立て、目は開いてご本尊、または尊像のお顔を仰ぎ見る。
- ② お看經中は外の動作をつつしむ。
- ③ 二人以上の場合は正面に坐る人が導師ですから、たとえ子供であっても尊重しなくてはいけない。
- ④ お看經中に他人に声をかけたり、子供を叱つたりするのはご法様に失礼となる。
- ⑤ よそ見をしないこと。体をゆすつたり、首を振つたり、いねむりをつつしむ。

なお、左の開導聖人の教えをかみしめてください。

ご教歌『身はここに心はよそに飛ぶなれば目はふさぐ也口はやむ也』

ご指南『南〇經の文字に心を留めて声をはり上げ唱へて、我が声を我が耳にきくやうに唱ふべし。外の音の障りにならぬ様、太鼓、拍子木

は尤も弄引（伴奏のこと）となるなり』『さわがしきが信心と思ふべからず。また法体の折伏

（お看經の音が他人にきこえること）は殊勝（なるほどと感心するような態度）なるがよろし

## 法 灯 相 続

全ての信者が、法灯相続に成功すれば、一戸の教化もできなくとも、信者はネズミ算式にふえつづけます。日本中、またたく間に、仏立宗一色にぬりつぶされてしまうでしょう。しかしながら、事實は、そうでなく、むしろ法灯相続に成功する家庭はマレで、沢山の信者の子弟が、今も未信者のまま、日本全土にちらばっています。

過日、第四弘通区、浜松静岡の九ヶ寺院が、弘通新年大会を行ない、信者の代表が舞台にあがって、「法灯相続」と題する、公開座談会を行ないました。

この日の結論は、「法灯相続ができないのは、全て親の責任」ということでした。家庭ごとに、色々な事情があつて、言い訳をすればいくらもできるのですが、親子そろって信心をしている平和な家庭は、言い訳からは絶対に生れてきません。

特に役中ともなれば、受持信者に多大な影響を与える立場ですから、法燈相続のために、もう一本のお看經をあげるような信心前になりた

# 無始已来のご文について

遠くうかがい知ることのできない過去から現在までの、法華経不信の罪を懺悔して、未来成仏にいたるまでの信行精進をお誓いするご文です。

法華経不信の罪などといっても、大方の人は、恥かしくもおそろしくも感じていません。ご信者も初信のころは同様です。

法華経は仏さまの信仰体験談であり、同時に万人の幸せになる道です。仏さまの悟りとは、法華経的な生き方をしない限り、一時的には栄えても、結局は未来永劫苦しみの底に沈むという事です。自らの手で自らの首をしめる、陰惨でかつ救いようもないものです。

勿論、永い輪廻の間には、世の法律でさばか

れる、様々な悪業を犯したであろうことも想像にかたくありません。

こうした過去より積み重ねてきた、重い罪を、今度お出逢いした真実の大法である上行所傳のお題目によって消滅し、幸せにさせていただけうというのがこのご文の意です。

人の値打は、その人のもっている罪の意識の多寡で知ることができません。殺人をしたり、泥棒をしても、人にみとがめられなければ平気である者もあれば、百点満点と思える仕事をして、もつと別の方法を採れば、沢山の人を幸せにできたのにと悩む人もいます。

お互いご信者は、心の優しい、反省自省のできる人間となり、過去のことばかりでなく、現在のことにも、充分神経を使った生き方をしたいものです。

## 言 上 文

お看経のとき、最初に「むしいらい」を唱え、次いで第二段「によらいめつ」を唱えた後、導師だけが誦する言葉が「言上文」です。お講など正式な法要ではお看経を途中で切ってお導師が言上します。

これは寺院により、各々伝統やしきたりがあり、長短、広略、順序など多少の違いがあり、ひな型を印刷して配っているところもあります。よう。

いずれにしても、言上文には次ぎの四要素があります。

### 1. 勧請文

三宝と蓮・隆・扇三祖、歴代直系の講有上人への報恩のお呼びかけの文

### 2. 祈願文

「総願」としてご弘通の大願を言上し、次ぎに「別願」として個人のご祈願をする文

### 3. 回向文

先祖代々の靈（総）と当日命日速夜（命日の前日）の諸靈の追善菩提の文

### 4. 結願文

『令法久住自他安穩同歸常寂』の文  
このうち、勧請文はお看経の最初に、結願文は最後に言上します。

祈願文と回向文は初めと終りと二回言上する場合も、略して初め祈願文、終り回向文と一回づつにすることもあります。

ご回向の法要には、本庁発行「妙講一座」に載っているお経文、ご妙判（お祖師さまのご書）の一節などが言上されます。

言上文は長いほどよいものではありません。要はお題目口唱ですから、お助行の場合などではできるだけ簡潔にします。

結婚式、地鎮式、上棟式など、それぞれ特殊な言上文を用意することがあります。また葬儀などの場合、故人の徳をたたえる「歎読文」というものもあります。

## 言上文の実例

言上文がわからないばかりに、お助行も喜んでできないという人がいます。又、自分では言えても、人に教えられないので、受持の信者が、幼児のように、ただ無始以来のご文だけで拝んでいる班もあります。

弘通局から発行された「新入信者のための栞」には、ごく一般的な言上文の例がのせられています。各寺院に、まだ残っているはずですから、先づ、基本を覚えて、それから、各寺院の特色を生かした言上の仕方を学ぶように指導してください。

左に、一部を紹介します。

### 言上の仕方

お看経の前後に、私は、こういうつもりで唱えしますと、仏さまにお約束することを言上といえます。はじめのうちは、無始己来のご文を前後にあげて、お約束やお願いの部分は、心

の中で申し上げれば、それで充分です。しかしなれてきたら、こんな風にも言上してみましよう。ぐっと厳肅な気分になります。

「南無末法有縁之大導師高祖日蓮大菩薩大慈悲大恩報謝再興正導門祖日隆大聖人大慈大悲大恩報謝代々之先師聖人等報恩謝徳

南無本門仏立宗開発教導日扇聖人大恩報謝、第

二世講有日聞上人、第三世講有日随上人、第四世講有日教上人等報恩謝徳

弘通広宣折伏成就当宗繁榮、御弘通の大願成就なさしめ給え

『ご宝前に於て謹んで申うところは○○家先祖代々之靈追善菩提(○○之靈追善菩提)

御宝前に於いて謹んで祈願し奉る○○罪障消滅信行増進(健康増進、心願成就)ご奉公成就の御願感応道交哀愍納受。本門八品所願上行所伝

本因下種の南無妙法蓮華経』

これよりお題目を唱えます。終りの時の言上は『』の中だけで結構です。

## 如説修行抄

ご教歌 ことの葉におがむといへど如説抄

いはれしらねば仰ぐよしなし

1月6日から節分までの一カ月間、寒参詣がはじまります。日蓮大士ご門下いっせいに行われる寒修行は、お祖師様の佐渡配流のご艱難をしのび、怨嫉(おんしつ)妨害)に負けない信心を磨き、その功德をいただくという伝統のある大きな修行です。

この期間中に「如説修行抄」を5日ごとに一段ずつお唱えのけいこをするのが恒例となっています。

またこのご書は「仏立要集」としてお寺でもお講席でも毎月一段ずつお唱えします。一体、このご書はどういういわれのものか、それをシカと心得なさいとお示しのご教歌です。

×

如説修行抄(略して「如説抄」または「修行抄」は、末尾に「文永十年(西紀一、二六二)

癸酉五月の日 日蓮在御判」とありますように、

日蓮大士のご生涯の、最後最大のご法難である佐渡ご在島中のご書で、鎌倉をはじめ各地のご信者さんへ、指導者としてのお祖師様のご法難で不在になっても、決して法華経の教えを疑ってはならぬ、しっかりお題目を唱え貫きなさいと鼓舞激励されたご書なのです。お祖師様ご自信のご信仰とお慈悲の思いがクライマックスに達したときの、私達信者一人一人のためにくだされたご書です。そして、特に終りの「此書御身を離たず常に御覧あるべく候」というお言葉は重要で、このようなお書添えは他のご書にはありません。

日蓮は、からだは遠く佐渡の国にあるとも、魂は汝等につき添い、汝等と共にあるのだ。決して退転してはならぬとの親身のお励ましを

いただいているのです。

また、此のご書には特定の宛名がありません。それは「人人御中」として特定の一人ではなく、多数のご信者一人一人に呼びかけられたのです。当時のご信者はご文のようにこのご書を回覧し、書写し、どれ程か心強く、ありがたくいただいたことでしょうか。それは七百余年を経た今日の私達にとつても、まったく同様の、生きていますお祖師様のお魂のこもったご書です。

このようにわかれで当宗では全信徒がおほえて一字ももらさず全文を拜誦させていただくのです。

寒さと、ねむいのと、横着や物惜しみに負けない修行の寒参詣からまず始めましょう。如説抄から、お祖師様の励ましのお声がきこえるではありませんか。

## 南無久遠の文

お経の終りに必らずお唱えする「なむくんのご文のことです。このご文は当門勧請の列祖第二、日像上人以来妙蹟寺（後の妙本寺で、門祖日隆聖人の出られたお寺）に伝承されたものを、開導聖人が校訂され、妙講一座の終りに編入されたもので、漢字ばかりですがお経文ではありません。

南無久遠は懃懃再修の文といわれ仏祖諸天先師聖人をお経の終りに再び勧請し、回向し、ご守護をねがうご文です。仏、菩薩他諸天、諸神の数字やお名前は法華経に説かれたことで、法華経は真理を説くのですから、世界中のあらゆる神々が行者を守護するのです。

『回向供養妙法口唱講讃功德倍增法楽威光増益護持妙法利益衆生』の文は前後二回出ていますが、前部は諸仏、諸菩薩、仏弟子と、蓮隆兩祖、代々の先師上人に対し奉り、妙法口唱の功德をもつて一切衆生のご利益をねがい、後部は

## 如説抄の唱え方

何年信者をしていても、如説抄を正確に唱えられない人がいます。そういう方がいたら、次のように教育をしてください。

如説抄は、かならず譜本によってください。つまりマス目が切つてあるものです。宗務本庁制定のものですと、そういう神経がゆきとどいています。

それから、お唱えをする時にはできる限り大きな声をだすことです。間違いが早くわかります。と、同時に、たえずお導師の声に耳をかたむけて、合わなくなったら、すぐさま修正をしなければなりません。

正しいお唱えの仕方をテープに収めて勉強をしている人もいます。一日、一段づつ、練習のつもりで、あげさせていただくのも、効果のある方法です。

法華経行者守護の諸天全神にそれを請い奉るのです。（勧請―供養―回向）

『天長地久国土安穩』を祈り（回向―祈願）

『諸壇施主息災延命恒受快樂』と信者大衆へ回向―祈願をし、

『所志精霊等面々各々出離生死證大菩提』と各々志すところの精霊に回向し、

『法界平等利益』で一切衆生、平等にご利益がゆきわたるよう回向し祈願する言葉でしめくられていきます。

「大梵天王」とはインド古来最高の神で、キリスト教のヤハヴェ（ゴッド）、イスラム教のアラーもこの類です。

「釈提恒因」は帝釈天のことで、ヒンズー教のインドラ神のことといわれます。

この二天で、世界中の神々が代表されています。「自在天」はいわゆる第六天、欲望の神とされ、悪魔の類ですが、妙法経力に浴して悪魔は転じて守護神となるのです。

## お寺参詣

お経文には「見仏聞法」とか、「往詣仏所」「来至道場」と説かれています。

仏のご在世当時の信者は、いつでももみ仏のおすまいの所に出掛けて、直接教えを聞き、仏道を修行したというのが、このお経文のみ心です。ですから、仏がご入滅された今は、その教法が正しく伝えられているお寺に詣り、お講師からご法門によって、三祖のみ言葉を聞かしていただくかなければなりません。お寺参詣は、仏道修行の基本ともいってよろしいのです。

勉強の仕方が多様となった時代では、自宅にあつて、本などを読んでも、ある程度信心を理解することができますが、頭から入ったものは、なかなか血肉にとけこみません。これは、学校の勉強やおけいこ事を考えても、簡単に判つていただけるでしょう。暑さ寒さを厭わず、お寺に出かけていく、積極的な気持ちに、感応するものがあることを忘れてはなりません。

## お講参詣

講とは「解説教導」といって、お題目の尊いこと、ありがたいこと、又正しい信心修行の仕方や信者の行くべき道をわかり易く教えていただけ、信心の解説、教導の場です。

当宗では、これをお講と称して、毎月ご信者の家で奉修しています。(お寺によって、お講の種類、呼び方は様々です)

生きた仏教であるがためには、信者が現に悩み苦しんでいる現場(家庭)に出かけて、教講が胸襟を開いて話しあわなければなりません。ここにお講の重要性があります。

開導聖人は、お講を当宗繁栄の生命線とされ、信者は一人のこらずお講をつとめ、お講に参詣しなさいと教えられました。

ですから、役中は、受持の信者をすすめてお講願主とし、又お参詣を将引しなければなりません。

日蓮大士は「須弥山に近づく鳥は金色なり」と仰せにられました。夕日に輝やくヒマラヤ山にむかつてとんでいくと、どんな鳥でも、金色に光つてみえるというロマンチックなお言葉です。これと同じように、お寺参詣に励むと、いつの間にか、法華経のみ教えが身につく、法悦の生活が送れるようになるのです。

仏典には、お参詣をした人が、壁のスキ間を発見して、ボロクズで補修して帰ったおかげで、死ぬべき命を助かったというお話があります。これは習慣的なお参詣から一歩すすんで、何かお寺のためにすることはないか、同信のため役立つことはないかと考えた人が思いがけず大きなご利益をいただいたお話です。役中は、この心構えを忘れずに、一人で呑気にお詣りをするのではなく、受持信者を連れだしたり、ご法門をひかえて、家族に教えてあげたり、一回一回のお参詣が、一つ一つ功德になるようつとめたいものです。

せん。

そこで、お講の功德として、次の三点を教えながらあげていただきたいものです。

- (一) ご法門を聞くことよって、信心が何であるか理解することができる。
  - (二) 先祖の回向や、家内円満、心願成就等をいのつていただくことができる。
  - (三) 沢山の信者が集まるところから、ご利益談や体験談が交換され、信心の疑問が氷解し、異体同心をはかることができる。
- なお、当宗では、入信後三年を経て、お講願主となった人を、正宗徒といつて、会社でいえば正社員とみとめています。

五年、十年とたつて、いまだに正社員にもなれないようでは、社会的にうだつがあがらないように、正宗徒となつて、お寺やお講師に外護のご奉公ができないようでは、信者として、先があんじられます。慈悲の心をおこして、お講願主となるよう、すすめてあげたいものです。

## 法門

「法門」とは、教えの門、お経文に「仏教の門を以て三界の苦を出て涅槃の楽を得」とあり、み仏は人々を救う為に説法をして法門を示され人々のご利益を頂くため、聞法によってこの門をくぐらねばなりません。仏の説法、衆生の聞法、この二つで仏法が人々を救うのです。

当宗のいわゆる「ご法門」は、形の上では他宗のお説教に似ていますが、内容がちがうのです。ご法門は法華経本門の教えですから、「折伏」です。折伏は即聞即行と申して、そのまま、直ちに実行にうつさねばならないことですから、「ご法門聴聞」とは、実行を前提として聞くもので、ただ感心するだけでは意味がありません。ですから「勸誡二門」と申して、こうせよとすすめる(勸)と、こうしてはならないと誠める(誡)のどちらかの指図です。

また、「片落ち」と申して、特定の人にあてはまるように、「右へゆけ」、「左へゆけ」と

具体的に示されます。

私達はいちいちご法門の指示に随って目をひらき、方向を定め、実行の足をすゝめる、これを「智目行足」と申します。自動車にたとえれば、智目はハンドル、行足はエンジンに当り、何れがかけても目的地にゆけないのです。

聴聞の心得

① 「多聞」、一日ご法門を聴聞しなかったら、み法の教えに背く勝手な考えも起りかねないのが、私共の心です。一度でも多くご法門の座にお参りする心構えが大切です。

② 「転教」、聴聞したご法門を覚えておいて、それを他人に伝えることを「転教」と申します。在家信者がお助行折伏行(お教化も同じ)をする場合、自分の体験の中に、以前に聴聞したご法門の筋を通してお話しをする。これが転教となり、菩薩行の中の下化衆生という莫大な功德となります。役中の大切なご奉公分野です。

## 誓願と祈願

「誓願」とは、もともと仏さまや菩薩がたがお立てになる願で、アミダ仏極楽往生の本願が有名ですがこれは方便で、当宗真実法華経、の本仏釈尊の「本誓願」(迹門・方便品)から本門・寿量品の『常ニ自ら是ノ念ヲナス、何ヲ以テカ衆生ヲシテ無上道(法華経の修行のこと)ニ入り、速ニ仏身ヲ成就(成仏)セシメント』

という「久遠本誓願」が示されます。三世にわたり、地獄の底まで救いあげずにはおかないぞーという、実に広大無辺深々の一大誓願です。菩薩は一般に「四弘誓願」を持たれるのです

が、開導聖人は妙講一座で『願はくは生々世々菩薩の道を行じ、無辺の衆生を度して、永く退転なからんことをおもふものなり』と仰せで、これが高祖日蓮大士の「一天四海皆帰妙法」の

悲願を受け継がれた「ご弘通の大願」です。

私たちもこの誓願を体するわけですが、「無辺」(限りなく一人でも多く、一切を)の中に、せめて一年間にお教化何戸、お助行を何戸というように一定の期間を区切って、数も分相応に目標を立てて精進するのです。

実は、この誓願は入信をしたときから立てられているのです。「むしいらい」のご文を唱えるのがそれです。そもそも「本因下種」のお題目自体が、そういう本性を具しているのです。ですから毎年教化誓願をたてるのは、それを自覚し確認するためにすることなのです。誓願を立てなくてもお教化はしますから、などというのは矛盾です。

すべてのご利益は、願わずともこの誓願の認識から出てくるのです。

ご教歌 み仏にたてし誓ひをやぶらずば  
いまより法の光りをぞ見る

さて「祈願」とは、誓願が仏・菩薩の願なのに対し、凡夫の願いのことです。現世で現証のご利益を頂くお願いです。病氣全快、商売繁昌をはじめ、次から次へと、いろいろの個人的な心願があるはずです。遠慮なくいちいち祈願をしてください。小さなことでもご祈願することによってそれが目標となり、お願いがかなうことによって信心が増進するのです。「何かいいことがあるだろう」では手綱の切れた馬のようになってしまう。人にきかれてはまずい事は「心願成就」でよろしい。

ここで注意すべきこととして、当宗の祈願は「祈誓」と申して、ご祈願に見合うだけの修行(精進)が必要なのです。これは因果の道理として当然のことです。お看経一万べん(約お線香7本)とか、開門参詣一週間とか、昔からよくいわれることです。ご祈願を言上しておけばそれでよいという横着ではお願いはかないません。本物の宗教だけに、こちらも真心で、きび

しいところがあるのは当然です。  
ご教歌 祈願して成ずるものと捨ておけば  
権兵衛が種まきからすほぜくる  
ご祈願↓精進↓現証↓ご利益↓信心増進という  
繰り返しによって、ご法門のとおり、「ご奉公  
成就」「教化誓願成就」というご祈願を本心か  
らできるようなれば、菩薩の誓願をわがもの  
として、成仏への道に入るわけで、それこそ信  
徒の本命です。



## ご教歌

いづつかがっても、ご法門は『ご教歌にー』  
から始まりますが、あのお歌は、お講師(教務  
)が自分で作ったのではもちろんありません。  
お作りになったのはお祖師さま(日蓮大士)で  
もなく、仏立開導日扇聖人です。  
開導聖人は32才で得度される以前、すでに書  
家、歌人、国文学者として京都では有名な方  
でした。

「書と歌は吾佛道の契なり かきわくるにも  
おもひやるにも」  
と詠まれて、歌才をご弘通に活用されました。  
また、

「歌にして教へておけばいつまでも 御法門  
をば忘れざりけり」  
「これは歌の徳を歌にしたる也」

と仰せのように、短歌は『三十一文字、敷島の  
道』といわれるほど、ひとつのまとまった思想  
や感動を端的に表現ができ、また口調もよく覚  
えやすく、百人一首カルタなどで古くから民衆  
に親しまれ、俳句とともに日本文学の華です。  
難解なお経文や、お祖師さまの教えを、その  
まま、わかりやすく覚えやすい短歌にして示さ  
れたのがいわゆるご教歌で、約三、四〇〇首ほ  
どあります。教学的なもの、体験的なもの、訓  
戒的なものなど多彩で、中には京都地方の方言  
や俗語も使われているものもあります。その奥  
には深い「がんちく」があるのですから、かりそめ  
にも軽しめてはなりません。  
お経文にも文章の部分(長行)と、その教え  
をさらに、覚えやすい詩の形にまとめた部分(偈)  
と、交互にくり返えされているのです。

## 布施と供養

布施というのは六度（六波羅密）という菩薩の行ずる六課目の修行の第一に挙げられた大事なことで、「広く相手を選ばず、好悪の感情にとらわれず施しをする」という修行で、貪欲の煩惱に勝つ修行です。菩薩行は布施行の一語に尽きるとも言えます。

布施は「法施」と「財施」に二大別されます。法施とは主に出家（僧）のすることで、教え導き救いたすけること。財施とは、在家信徒のすることで、お金や品物をささげることです。

供養というのは、仏・菩薩（三宝）に対して、その説法、ご利益に感謝し、衣・食・住、其他の必要な物をお供え（お給侍）することで、「利供養」「行供養」「敬供養」の三種があります。利供養は金品をたてまつる、いわゆるご供養です。行供養はからだでする、いわゆるご奉公で、敬供養は心でする、いわゆるお給仕です。以上は本来の意味で、布施は相手をえらばな

いのに対し、供養は三宝にたてまつるという点がちがいます。ですから僧（お導師、講師）に対する財の外護（在家信者のつとめ）は正しくは利供養のことで、これを「お布施」というのはおかしいのです。

また、信者さん同士でご供養をすることは、当宗の教義の上で、席主が参詣者の信心に随喜して僧宝に準じて扱い、功德を積むわけです。しかしこの場合は飲食品物だけで金銭は用いません。ご供養は単なるつきあいのもてなしではありません。正座し合掌して、『ごちそうさま』とは言わず、『ご弘通の御為に此の飲食供養を受けさせて頂きます』というような言葉を唱えて、喜んで頂戴するのです。

とまれ、布施供養も、お手本はお祖師さまで、身命をみ仏にご供養され、私たちにお題目を布施してくださいましたのです。私たちの信心修行ご奉公は三宝に対しては供養行であり、同士や世間の人々に対しては布施行なのです。

## ご有志（三宝護持の項参照）

ご有志というのは当宗独特の用語で、「志を有つ」ということ。仏宝、僧宝護持、つまり「喜捨」とか「供養」（正しくは利供養）と同じ意味ですが、ご供養はお導師、お講師など個人に対してですが、ご有志はお寺とか、公的な場合に使います。

そもそもご供養は随喜（自発的に喜んで）ですることですが、ご有志とは、凡夫は罪障が深くてなかなかご法さまのおんために出すことを喜べない、それを、たとえいやいやながらも無理にでも、多少とも「志を有って」させて頂くーという意味があります。開導聖人のご指南（み教え）に

「たとひ心に惜しやと思ふとも、捨したるは欲に勝ちたるなり」とお示しで、「喜んででき

れば、それだけ功德は大きいのですが、『無理にでもさせて多少とも功德を積ませる』という折伏の心が入っています。

近頃はお寺の側で計画を立てて、あたかも信者さんに押しつけるような感をいだかせるような場合もあるかもしれません。しかしこれを、功德を積む機会、仏祖のお計らいと受けとるところにご有志の結構な意味があります。人間が相手ではない、ご法さま、生身仏（仏宝）にさしあげることなのです。

ご有志したものはどのような使い方をされても、それは捨てたものですから、一切お任せするのが信者の心意気であり、信心であり、そこに罪障消滅があるのです。欲に勝つーとはこの所です。

## 「ありがとうございます」

― 仏立信徒の合い言葉 ―

なぜ仏立信徒は合い言葉として、ありがとうございますとございます―とあいさつするのでしょう。

開導聖人が明治15年に示された信者の心得として『我が身をかえり見、有難う存じますと口ぐせに申せ』とあるに由来します。その主旨をご教歌に

『何もよし人と生れて要法に あひし縁しは有難の身や』

と詠まれて、ただありがたいとしか言いようがないという心境を理想として示されてあります。

元来「ありがたい」という言葉は感謝と同時に尊敬の意味があります。他人に対するあいさつとして、これほど結構な言葉はありません。人間の業（行為、働き）というものは善にも悪

でも、すべて意に思うこと、口で言うこと、身で行うこと―の三要素（三業という）によるのです。この三業の中で他人に対する影響力の最も大きいのは口業（口で言うこと―言葉）です。ですから当宗は「口業正意」として、まず口の修行、お題目口唱を基本とするので。他人に對し、最も善い言葉（愛語、軟語）であいさつするのが当然です。

感謝を示すのは、「衆生恩」があるからです。高祖大士は「知恩報恩」こそ仏法のすべてであるとされ、実践倫理の根本とされました。衆生の恩とは他人のおかげを知ることです。他人がいなければ、私たちはご奉公もできません、罪障消滅も功德を積むこともできませんし、だいち人間として生きられません。

尊敬を示すのは、「不輕流」を宗義とするからです。高祖大士は法華經本門に説かれた不輕菩薩のあとを継ぐ―と仰せです。不輕行とはその名のごとく、「会う人ごとに、ただ深敬禮拜

教えてくれる人）として敬うことです。

ありがとうございます―というあいさつを商人のように軽々しく言うのではなく、ご本尊に向いお題目を唱える気持ちで言う。それが私たちの理想なのです。

## ありがとう一、二、三、四集

弘通局から「ふれあい用」に「ありがとう」という小冊子が刊行されました。これだけでなく、過去にも、幾多の立派な本が発刊され、又今後も続々と生みだされることでしょう。しかしながら、今迄の経験によると、ご信者お互いが、感心をしたり批判をしたりするだけで、その本来の目的である宗外者にほとんど配布されていないのです。

そもそも、この種のものは、教化の現場で苦労されている皆さんの手助けのため、紙の爆弾として、宗費を使って出来あがったものですか

ら、信者宅に死蔵されていたのでは、こんな無駄な話はありません。

ある役中は、「ありがとう」を差しあげる相手が思いつかず、町内の郵便受の中に投げこんできたとのことです。あまり感心した話ではありませんが、お経机の引出しにしまっておくとを考えたら、はるかに結構なことです。役中は、宗の刊行物を無駄なく、効力を發揮するよう、受持信者を教育することも大事なご奉公と心得てください。

## 高祖大士尊像

仏立信徒が各自のご宝前に奉安する高祖日蓮大士の尊像は、本山宥清寺に開導聖人がお入りになる（明治2年）以前から、本門法華宗妙蓮寺の末寺台帳に『宗祖大士の自開眼靈像安置、日法上人（お祖師さまの直弟）の彫刻・』と記された尊像をそのままに模写したお姿です。

つやのない黒一色なのも、この木彫りの靈像が六百年を超える古い自然の色をそのままに写したので、黒は「玄」に通じ、他のどんな色にも染まらず、一切をおおう高祖大士の大慈大悲の色とも拜されます。

その姿勢は、左手に法華經五の卷勸持品（法華經行者の忍難弘教が説かれてある）を捧げ、右手に笏（しゃく）を持たれ、破邪顕正の忍難折伏の相で、他派の祖師像が、多く合掌印であ

るのに比べ、まことにお祖師さまのご本意そのままのお姿です。お題目の開眼をした生身のお祖師さまです。

尊像は信者がいよいよ信心増進して、お祖師さまをお手本として折伏行に徹せんと決定したときに、生身のお祖師さまとしてお給仕をさせていただくためにお迎えするのです。ですから、やたらに尊像奉安をすすめるものではありません。

尊像への定例のお給仕として11月の初めに「お綿かけ」、3月の終りに「お綿はずし」の儀をつとめます。これは小松原法難（旧11月11日）の故事によるご門下の行事です。このときおかつ、お座布団をとり換え、おちり払いをします。できるかぎりお講師に教わって護持者がさせていただくのです。

ご教歌  
「尊像をいきていますとおもはねば 信心するも無益也けり」

## お戒壇と仏具

戒壇というのは、昔、仏さまご在世のころ新弟子になる者に「戒」を授け、お弟子はこれを受持することを誓う式場のことで、地面より高く壇を築いてあるので戒壇といい、仏滅後は中国にも日本にも作られませんでした。

法華經（本門八品）の教えによれば、そのよくな大げさなものではなく、家の中でも、生身佛であるご本尊のご宝前に坐し、一心にお題目を口唱するとき、戒の授受が行われ、そこを「本門の戒壇」と申すのです。これが本来の意味ですが、転じて「ご本尊をおまつりした所」さらにご本尊をおまつりする廚子を「おかいだん」と呼んでいます。

みかけは仏壇なのですが、意味がちがうのと、構造も特徴があるので呼び名もちがうのです。

おかいだんは護持ご本尊とご尊像とを奉安できる大きさがあり、塵や虫などを防ぐためにガラス戸が入っている点、普通の仏壇とは違う点です。購入するときは注意してください。外側のとびらは有るのも無いのもあります。飾り金具は使われません。

また、家につくりつけにする場合もあり、器用な人の手造りもありますが、必ずガラス戸を付けます。

お戒壇の据え場所は家の中で最もよい部屋、よい位置を選びます。向きは南向きがよいとか、西向きがよいとか言われますが、それは気にすることはありません。ただ、直射日光があたると傷んだり、色があせたりするおそれがありますから避けてください。

高さは経机の前に坐って、無理なく拜める程度に高い位置に調整（低い場合は台を作るなど）します。見くださような据え方はいけません。

仏具として入信のとき、お天目、花器、燭台、香炉とご飯を盛るぶつけ（仏筭）の五つは備えねばなりません。次ぎにお酒を供える酒錫一對、（これはお天目とセットになり、前机という台がつかます）たかつき、三方（大と小）に次いで灯ろう（常灯明）、吊り灯ろう（お看経の時だけ）線香立てを備えてゆきます。

お戒壇の前に経机を置き、上におりん（大型のものはがんで、傍に置きます）や木琴をのせます。

以上で完全です。外に天がいやようらくなどの飾り具は、好みによって備えるものです。

## ご宝前のまわり

ご宝前は生身の仏様、お祖師様のご坐所ですから、まわりにはなるべく私たちの使うものを置かないようにしてください。床の間があつてお戒壇を納めてある場合は、特に他の物を置かないように。

お戒壇の上には紙を一枚のせて、ほこりがつくたびとりかえるようにしますが、この紙はお戒壇の大きさにぴったりに切つて、下から見えないようにしてください。

扁額はお戒壇の上端、またはその上部のランマに掲げます。

肖像画や写真の類はご宝前の真上でなく、横のランマに掲げるようにします。

また、ご宝前やお戒壇の引出しなどに貯金通帳や貴重品（指輪、時計など）を入れておく方

## ご 壯 嚴

新入信者の間はともかく、相当に古いご信者で、他宗のお道具をつかったり、蓮の花などをあしらつた趣味の悪いお線香立てを用いている人がいますが、感心しません。仏丸のついたお道具で、身心ともに、すっきりしたご信者になりたいものです。

とはいふものの、お道具も値段がはつて、役中として、なかなか折伏しにくいという面もあります。

そこで、ある役中は、こんな風にご奉公をしているとのこと。

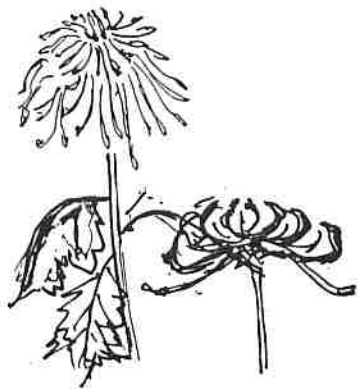
ご利益をいただいた信者があると、その喜びごとの大小に合せて、高いもの、安いもの、いろいろおすすすめをするというのです。

効果のあがりそうな方法です。

信は壯嚴より生ずといわれていますから、そのご家庭にふさわしくないと思つたら、根気よく、折伏をしてあげたいものです。

がありますが、これはご宝前なら安全一という気持ちからでしょうが、ご法様に財産の番をしていただくのはどうかと思われまますし、実は私達のそういう心理を知っている泥棒がいますから、かえつて安全ではありません。

とにかくご宝前のものと、自分たちのものとははっきり区別して、混同しないように心がけることが、お敬いのあらわれです。



## お供水

△お天目▽

当宗ではご本尊の直前近く、お天目にその日の初水を供えます。毎朝、自分たちが使う前に初水を専用の器にとっておき、ご宝前のおそうじのとき、前日のものを他の器に移して、入れかえて供えます。水を大事にしてお供えるのは、ご本尊様が「生きて在す<sup>まじま</sup>仏様」であるからです。生きとし生けるものにとって、空気と同様に水はかせないものですから。

また、水びんに水を入れて別に供えますが、これはお供水（おこうすい）といって、自分達がいいただく為にお供えるのですから、お看経がすんだらお下げして、お供水用のヤカンに移しておき、また新しい水を入れてお供えます。前記のお天目のお下りもこれと混ぜていただき

ます。

お供水はその日のうちにいただいでしまうようにします。もしお供水が残った時は、ご飯にたきこむとか、植木や、家畜などにいただかせ、捨ててしまうことはつしむべきです。

お供水は水であっても、ただの水ではない、尊いお題目のあがったお水として大切にすることが信者の心得です。紙幣は紙でも、ただの紙ではないのと同様です。水の一滴も受けつけないという重病人がお供水の場合のどを通るといような、お供水についてのありがたい体験談は知る人ぞ知るところです。このような、体験を持つ信者さんしてみれば、とても粗末にはできないものです。

ですからお供水をいただく態度も、けいけんな敬意をして、おしいただくのが昔からの作法です。

## お仏飯

たきたてのごはんをご宝前に供えることは仏教徒の昔からの習慣です。

お仏飯をもる器は中世の頃実際に使われたけ（筥）をかたどったものです。その頃はごはんをアイスクリームのように盛ったのです。

ごはんは飯器のふちの外からはみださないように専用のしゃもじに水をつけて（お湯だどごはんがねばりつきますから）形を整えます。

×  
供えたお仏飯は、お看経が終わったとき、またはおそくも一時間後にはおさげしてください。冷えて固まったごはんをいつまでもあげておくことは失礼です。

お下げしたごはんは、家庭のごはん混ぜていただきます。

お仏飯はすぐに洗いあげておきます。

×

なお錫（すず）製のお仏器は、使っているうちに表面が荒れ、細かいひびが入ってきます。

これは熱いご飯をもるためですが、錫にはそういう性質があるので避けられません。ひどくなつたときは修理に出します。クロムめっきのものはそのようなことはありませんが、ハゲて真鍮の地金が出ると、ロクシヨウのような有毒なさびが出ますから注意してください。

×

お仏飯は新しくごはんを炊いたときだけ、お初穂を供えます。パン食の場合などご宝前だけのご飯を別に炊く必要はありません。

×  
時世とともに家庭でご飯を炊く回数がだんだん減っています。そして主食がパンや其他で食事をするが多くなりました。しかし、パンやスパゲッティなどをご宝前にお供えることは、いまのところふさわしくない感じがします。まだ何年か先のことでしょう。

## お供酒

お供水とお仏飯について、当宗では清酒をご宝前にお供えします。

「お神酒あがらぬ神はない」などという文句があるように、洋の東西をとわず神様といえばお酒はつきものです。しかしキリスト教では悪魔の水として用いず、特に仏教では不飲酒戒があり、仏前に供えることはありません。

当宗では高祖大士が薬酒として用いられたので、お祖師様にお仕える意味でおみきを供えます。

みきすずと称して、お天目の左右に一对、その為の器がおかれます。

おみきは毎日晩酌をする方は毎日、そうでない方も1日、13日、17日、25日、30日のような当宗由緒の日、甲乙お講の日（添講の場合でも）、恩ある人の命日、記念日といった日の朝お供えすると結構です。日本酒をびんのままでは

く、みきすずがなければ別の器（瓶子のような）を用意して取り分けて供えます。お寺のご宝前とちがい、家庭ではウイスキーやワインなど洋酒をお供えするのは不適當です。

× お祖師様ご門下では、いまのべたようにご宝前におみきを供えることがあります。だからと言って飲酒をみとめ、奨励するわけではありません。お供えすること、自分達が飲むこととは別で、ご宝前で酒宴をひらき、よっぱらつてヒワイな言動をしたり、赤い顔でお看経やお参詣をするようなことは厳につつまねばなりません。



## 香・華・灯明

香をたき、すがすがしい生花をかざり、お灯明をささげる。この三つを完備した上でお題目を唱えたてまつる―これが当宗の、ご宝前への日常の基本的なご供養ですから、どれひとつもかかしてはなりません。（毎日のおそうじについては後述）

### △香について▽

お線香を使うのは日本では足利時代からといわれます。法華経法師品には抹香、塗香、焼香と三つの香供養が説かれています。抹香は香粉を仏様のまわりにまきちらす、塗香は現代の香水のように身体にぬる、焼香は火にくべて香煙をたてるのですが、これらを焼香に類するお線香だけで代表させているわけです。

当宗では約40分間の長いお線香を用い、お看

経をあげます。朝晩一本のお看経とは約40分間の意味です。お講も、ご回向などの法要も、このお線香一本の長さを原則とします。ですから、短いお線香は使わない方がよいのです。

もちろんのことですが、忙がしいからといって、ただお線香だけでもすのでなく、かならずお題目をあげなくてはなりません。どんなに急いでも少くとも50ぺんのお題目は……。

お線香の火はお灯明のろうそくの火から取ります。先端が燃えている場合に横に振ると、折れて飛ぶことがありますから、必ず片方の手で、あおいで消すこと。手が使えない場合は、お線香をたてに引っぱるようになると、折れる心配なく炎はきえます。

香炉に立てる場合は、なるべく上端を持って上方から灰にさしこむようにするとまがりません。

お線香の下端をほんの2ミリぐらい折りつつ立てるとまっすぐ立ちます。

## △ 供花について▽

日本の神様にはさかき(榊)をかざり、キリスト教ではもみ(樅)の樹をクリスマスツリーとして神にささげます。このように宗教と花木とは関係が深いのですが、他宗教の場合は「魔除け」の意味が強いようです。

ご宝前に生花をあげるのは、法師品に説かれる「華香供養」で、生き生きと彩り美しい生花の清々しい香りを仏様にご供養させていただくことです。ですから「新鮮であること」が花供養の生命です。

お花はどんな花でも制限はありません。しかし習慣的に世間でさけているもの、例えばバラのようにトゲのある花などをあげると「変り者」と思われますから避けた方が無難です。

当宗の仏花は背部に必ず木の芯(しん)を立てます。普通花屋でつくる仏花は芯が入っていませんから、買う場合にそのことを注意してく

ご宝前にお灯明をあげることは、仏様にお目にかかる場合の表現です。お灯明の光りは、お慈悲あふれる仏様の御眼の光りです。ですからお看経のときはお灯明をあげます。お華は常に供えておきますが、お灯明はお看経のときだけとすのです。

ロウソクの灯明と別に、灯籠(とうろう)を飾る場合は、これは現在は電灯になっていますが、これは常灯明といって四六時中つけておきます。また吊り灯籠を飾る場合、こればお看経のときだけつけるのが習わしです。

燭台(ロウソク立て)は一對備えるのですが、やむをえぬときは片方だけでもよろしい。この場合はお花の反対側(ふつうは右側)へ供えます。

お寺ではお灯明も電灯になっていますが、家庭のご宝前ではロウソクを用いる方が「ご供養」の意になつています。

ロウソクは必ず、お線香1本以上ともせる大

ださい。花屋で買わず、庭に咲いた花をあげるのもけっこうですが、その方が安あがりだという安易なことでは真心がかけてしまいます。また菊などは花は永持ちしますが、葉が先にいたみますから早めにとりかえてください。

私達が服装にいつも気をつかい、汚れればすぐ洗濯をするように、ご宝前のお花には気をつかいます。この意味でご宝前の供花は「仏様のお衣」と考えてよいと思います。

ふつうお花はお戒壇の左側に供えます。しかし左側では不都合な場合は右でもかまいません。

## △ 灯明について▽

かがり火や灯明は、文明国でも未開の民族でも宗教行事にはかかせないものです。

仏教では、光明は「知慧」と「慈悲」という、仏様の御徳の象徴で、「法を灯明とせよ」という教えは、仏の教え(法)だけを依り所とせよということす。

きさのものを用以てください。しかし、燭台よりもあまり大き過ぎないように……。

ロウソクに点火する時、芯(しん)を指でまっすぐにのばしておき、マッチで一本に点火し、あとはその火から移します。一本づつ別にマッチを使う必要はありません。

芯の燃えカスが落ちて異常な燃えかたになつたときは、ロウソクを外して、くず入れへ軽く叩くようにすると燃えかすは簡単にとれるものです。

ロウソクを供えるとき、紋の部分に当ててある紙はとり除いてください。

日常のお看経では、一度消した残りのロウソクを用いてもかまいません。しかしお講などでは新しいものを供えてください。

## たかつきと三方

たかつき（高坏）は食物をのせる器として最も古く、二千年も前から使われたもので、そのころは土器でしたが、後世に木製となつて、形は方形でした。平な板に脚をつけたものです。

ご宝前には主にお菓子のをのせて、お天目の左右に一对供えます。現代はよごれないようにガラス器に入れてのせるようになりました。お菓子は和菓子を一人前ぐらいが適当です。バターや卵を使った洋菓子はいけないという制限はありません。

さんぼう（三方）は古来、神前（後には仏前）をはじめ貴人、儀式などで一般に、物（食物とは限らず）をのせたり、供えたりする道具で、元来は白木で作ったものですが、ご宝前用には塗り物、最近ではプラスチック製のもの、形も

はや三方とはいえない丸形のものが多くなりました。

三方にはお鏡餅をはじめ、果物などをのせて、たかつきよりも一段下の中央に供えます。お鏡餅は紙などを敷かずにお米をうすく置いて、その上に載せるとよろしい。お正月でもだいたいのせたり、こんぶやしだなどの飾りをつけたりせず、お餅だけを供えます。果物などは必ず洗ってから供えます。

三方はお菓子などを山盛りにしてもよろしい。しかし果物をたかつきにのせるのは不適當で、三方を使つてください。

以上、お盛り物はたかつき一对、三方が一つで完全です。この外に必要ながあれば三方にのせて脇に供えます。

お盛り物はたくさん供える方がよいとはいえません。お盛り物のために肝心なご本尊を拜むじやまになつてはなりません。ですから適當な量を取り分けてお供えすべきです。

## マスクと切り火

「ふくめん」

ご宝前のお給仕をするときは、いつでも必ず「ふくめん」をかけ、終つたあと「切り火」をして浄めます。

「ふくめん」をする意味は私たちの吐く息が、清浄なご宝前にかからないようにするためですが、これは「敬い」の表われですから、息をためてすれば「ふくめん」をしなくてもいいだろうなどと理くつをいわないように。そして誰も見ていないからと無精をしてはいけません。ちゃんとご法様がお見通しです。

「ふくめん」がどうしても見当たらないときは、ハンカチやちり紙をくわえてご免こうむる場合もあります。これはどうしてもまにあわないときのことです。□にあてるものですから、各

自めいめに用意すべきです。

どうしても他人のものを借りなくてはならないときは、紙をあててください。ですから「ふくめん」はお助行のときは必ず持つていく道具の一つです。ゴムのひものはのびたりしやすく、セルロイドはよごれ易いですから気をつけてください。ふくめんをかけて、かえつてきたない感じになつたのでは意味がありませんから。

「切り火」

ご宝前のお給仕が終つたとき「切り火」をうつてお浄めをします。二、三回打ち合わせればよろしい。火がうまく出ないからとヤケになつてたたかないよう、角が丸くなると火は出にくくなるものです。切り火は正面をさけて少し斜めの方から打ちます。

ご宝前に供えるお盛物は、供える前に切り火をしてからあげます。

ご本尊やご尊像に対しては、どんな場合も切

り火をうってはなりません。ご本尊、ご尊像はそれ自体いつも清浄でけがれることがないからです。

ご本尊などの「おちり払い」用のふでの類、おかとう、お綿などには、使用する前に切り火をします。

## 役中の七ツ道具

役中が、お講やお助行に出掛ける際に、忘れてはならないものがあります。

お数珠や妙講一座は言うにおよびません。妙講一座を空で唱えられる人でも、お講席には新入信者が参詣しているかも知れませんが、かならず持参すべきです。

フクメン、柏子木も大事です。寺報や大放光も時には、大事な所を読んであげる位のやさしさを持ってほしいものです。

案外に忘れ勝ちなのは、筆記用具に手帳です。

燧石（ひうちいし）と火打金も、ふくめんといっしょに、はじめから備えなくてはならないお道具です。

「ふくめん」をかけたたり、「切り火」をしたりするのは生きて在すみ仏に対する当宗独特の大事なマナーです。

ある役中は、部厚い立派な手帳を持っていて、見せてもらった所、受持信者の入信月日、家族の誕生日、近親の方の戒名と命日がひかえてありました。どんなにお助行を嫌う信者でも、「今日はお父さまのご命日ですから、お看経をあげさせてください」というと、断るものはないとのこと。

結婚記念日等は、当の夫婦でさえも忘れていくことが多いのに、それを祝われたりしたら、随分くすぐったく、又嬉しいことでしょう。受持ご信者が、来訪するのを楽しみに待ってくださるような、役中になりたいものです。

## おじゆず

日本では一般に「じゆず」（念珠、数珠）は仏教徒のシンボル、アクセサリです。じゆずの由来は古く、インドで仏教以前からあり、形がちがっても回教やキリスト教にまでも採り入れられています。宗派によりいろいろの意味付けがされますが、法華経にも、ご妙判にもありません。形や珠の数なども宗派によって違います。大玉2個と小玉108個を連ねたものが基本とされますが、半折にして大玉1個と小玉54個、さらに半分の27個のもの、また念仏宗は36個、禅宗は18個と多種多様です。

当宗では大玉2個と小玉108個の中に、色の変った珠または他より小形な珠4個（これは上行等四菩薩を表わす）を加えて112個を連ねます。大玉は釈迦仏、多宝仏を表わし、小房の10個の

珠は釈尊の十大弟子、大房に付けたやや長い形の珠は四大天王を表わすとされます。

ここまでは法華系のじゆずの共通点ですが、当宗では房の長さがちょうど大玉二つの間の長さと同じくして（他派より2倍ぐらい長い）先端を丸めず、長目に開いた房になっています。これは開導聖人が、他派との違いをひと目でわかるようにされたものといわれます。

おじゆずはご宝前に供えたり、教務講師にもんで頂いたり、いわゆる「開眼」をして用いますが、これは仏さまのおたましいを入れるというのではなく、持ち主の魂を入れると言う方が適切でしょう。つまり信者の魂というわけです。ですから紛失したり、こわしたりしても、お懺悔することはありません。

材料は別に定めはありません。象牙、水晶、めのう、こはく、白檀、黒檀、紫檀、菩提樹、梅や桜などが普通です。鉱物の玉は重くて、むとぎずがつき、糸が切れるのもめません。

おじゆずを使うのはご宝前だけですから、会議其他の場所でお題目を唱える場合は素手で合掌のままお唱えします。

既製品でなくとも、珠を集めて手造りにしても形式が整えばよいのです。

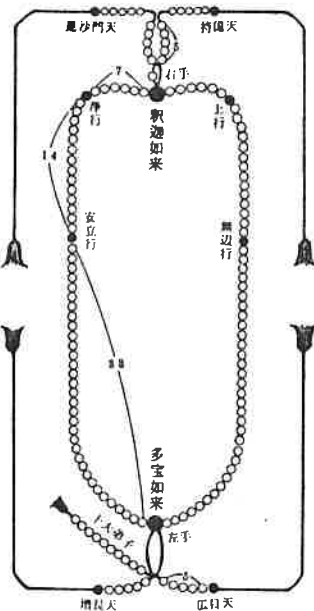
## お数珠のお開眼

新規にお数珠を求めた時には、お導師かお講師にお開眼をしていただきます。つまり、お数珠に魂をいれていただくのです。お寺でもお講席でも、場所はかまいません。それと同時に、お冥加料をつつませていただきます。こういう信心上の、いわば常識も、新人信者には、みんな目新しいことです。頭ごなしに「毎日持ちあるいているお数珠にみ仏のお魂が宿っていれば、たとえご本尊をおともしていませんよ。だからお冥加料をつつんでお開眼していただくのです。」といった風に指導してみたら

如何でしょう。

左に、お数珠の絵をのせます。

百八の珠は、私たちの心に巣くっている百八の煩惱をあらわしたものとわれています。



## 役務とご奉公

当宗の信行は団体的有機的であり、大きくは本山を中心に10の弘通区、その中の寺院単位に、信徒5〜7戸の「班」を細胞として、3〜4班で「組（または部）」、2〜4組で「教区」、大寺院では、3〜5教区で「連合」などと呼ぶ組織をつくって弘通活動をしています。

この組織をまとめるためにそれぞれ正副の「長」と、人事・庶務を担当する役「庶務係」と浄財を管理する役（会計係）などの役中（やくちゆう）が必要となります。

この系列と別に、宗令第八号第十九条による所属団体として、壮年会（男子信徒の会）、婦人会、青少年会、ボーイ・スカウト、ガール・スカウト、子供の会（くんげ会）など、性別、年齢層別に結成されて、各々に「会長」其他の

役務があります。また、寺院には事務局があり、その役務分担があり、弘通区にも本庁にもそれぞれ役務があります。

信徒は信徒としての修行である信行ご奉公の上に、役務としてのご奉公が加わるわけです。

お役というものは人間がきめるのではなく、実はご法さまがおきめくださることと受け取るのが信心です。ですから一度は辞退しても再度の声がかかれば、思いきってお受けしなくてはもったいないもので、自分にはとても……と感じられることもお計いできるようになります。

ご教歌に

『ゆけるだけゆけとてすすむ信行に

ゆかれぬ様にならぬ御利益』

とのお示しをかみしめて下さい。

## 講師・教務

当宗では出家得度した人、お坊さんを宗法では「教務員」、一般に「お講師」または「教務さん」と呼びます。つまり「お講をつとめる師」「ご法門を説いてくださる、救われる道を教えてください、ご法門を説いてくださる、救われる道をお寺にこもって、お葬式やおぼんなどに壇家をまわる一般のお坊さんというイメージをかえて、信心の指導者としての面を強調した呼び方です。つまり、当宗の講師は信行の上で、信者さんの信頼される手本となるような修行と、また信者さんの苦しみ、悩みをどう解決するか、どのようにして信者さんが喜んでご奉公できるようなにするかという勉強、仏祖のみ教え、つまりご法門の学習、この「行学二道」で人を導くという責務を負っているわけです。

## 正宗徒

各宗教団体は国法によってそれぞれ「宗法」を制定しております。

当宗宗法第二節第45条に『<sup>宗</sup>信徒であつて、宗徒となつてから満三年を経過し、常講を勤修するものを正宗徒とする』と規定しています。

この条文の前の第43条に信徒の義務として『信徒は、その所属する寺院または教会を護持し、進んでお講を勤修し、努めて助行に奉仕し、教化弘通に協力して、常に信行の増進および人格の向上を図らなければならない。』とあります。

正宗徒とは、この信徒の義務を全うできる信徒というわけで、具体的には常講（これを甲、乙などの二種類にわけている寺院もあります）を勤修することが条件となります。それは、お講こそが宗門、信徒双方の生命線であるからで

ですから、信者さんは「お坊さん」という見方よりも、親身で世話をしてくれる指導者、あるいはコンサルタントとして、私事でも何でも遠慮なく相談してください。

もちろん、講師も年令、体験、教養、性格など、その人々によりちがいますが、説くご法門や教導は、仏祖先師のみ教えを定規として、経力によるのですから、信者さんは信心で接し、信心で受けとめれば仏祖のおはからいをいただけるわけで、このことを忘れて講師を軽しめてはなりません。

ご教歌 題目の弘まる時は下種の時

師弟凡夫で信の一行



す。（お講の項参照）この意味がわかり、進んで喜んでお講をつとめご奉公の味をおぼえるまでに3年間の期間をおいたわけで、当宗の公式の信徒数は正宗徒の数によるのですから、第43条の信徒の義務によるご利益をいただいでください。

ちなみに第44条に『本宗所依の本尊を安置するに至らない』信徒で、『信徒名簿に登録された』信徒を「準宗徒」とするとの規定があり、いわゆる個人教化を受けた信徒です。なるべく早く宗徒、正宗徒になれるように……

以上、当宗信徒に正宗徒、宗徒、準宗徒の三つの区別のあることをわきまえてください。



## 組長と班長

ご教歌

一組の長なる人は其組の  
をこたり責むる役員なりけり

一人の為にも法をとく人は

是が如来のつかひ也けり

「組」とはだいたい現在の教区か部に当ります。とにかく何軒かのご信者をまとめる「長」という役柄の急所を示されたご教歌です。

教区長は会議に出て、お寺のご披露をよくわかまえて教区中に徹底するとか、部長其他の役中をうまく動かすとか、技術的な面でいろいろの注文がありますが、人には個性があり、技能の上で適不適があり、いろいろ要求してもうまくやれるとは限りませんから、私にはトテモ無理だと投出してしまふような場合もあります。

歌ですが、「班」という最小単位になれば「長」ではあっても全員を集めて号令をかけるわけにはいきません。それは、班となれば、その中には入信したばかりで西も東もわからない人、古くされて何でも知っていて横を向いている人、朝から晩まで忙しく働く人、子供をたくさんかかえて落付かない人、へそまがり、わがまま勝手というぐあいに雑多な人達を上げますわけですから、どうしてもこちらから出かけて行つて一人一人教え、はげまし、面倒をみなくてはならないのです。これはまったくご苦労なご奉公ですから法華経法師品に「能く竊かに一人の爲にも法華経の乃至一句を説かん。当に知るべし是の人は則ち如来の使なり」と説かれ、仏の代理をする者であるとその徳をたたえられているのです。このご文の後に「何に況や大衆の中に於いて広く人の為に説かをや」とありますが、これが教区長とか部長とかが主としてする「演説」です。しかしそれだけで人を助けることは

しかしご奉公というものは才能でするものではない。信心と誠意でさせて頂くことです。世間の役職と全くちがうものであることを、このご教歌からくみ取って下さい。「怠りを責める」とははげますことです。お経をはじめ参詣、教化、助行、ご有志など、その時々の方針に従って、はげますのです。はげます為にはお助行を励行するのです。口先でするのでなく信心でぶつかるとは問題ではありません。

話は上手下手は問題ではありません。要は功德になるか、ならないかがご奉公というものの基準なのです。小手先の技術ではありません。

おすがりして信心でぶつかれば仏祖のお喜びをいただき、ご守護があります。かならずご奉公成就して部内、教区内に現証が顕れますから、悲観なんかしないでがんばってください。

×

「長」たる者は「はげまし役」とは前のご教

むずかしい、半面どうしても個人への「説得」が大事なのです。この場合も方法はお助行です。そしてむずかしいことを教える必要はありません、ただお講とお寺への参詣をすすめはげましてください。「法を説く」とはこのことです。

お参詣さえすればそこで講師の指導、先輩信者のはげましが得られます。むかしは班長のお役を「将引係」と申しました。将引とは参詣に連れ出すということで、これが班長ご奉公の本命なのです。義納金を集めることなどは将引のついでにするのです。

×

ご教歌 奥深くわくる達者も足弱の

ためには戻れ法の山口

物事を勉強して「指導的な立場」に立つとき、私達はえてして、自分の初歩時代のことを忘れてがちです。としをとれば若いときのことを忘れて、何かにつけて「近頃の若い者は…」とこきおろす。こんな調子で「このくらのことがわ

からないのか。」という、思い上りになり易い。釈尊は何百何千のお弟子たちから世尊と仰がれましたが、ご自身は常に善友（同行の友達仲間）としてお弟子に接したことが古い經典に説かれています。

## 仏立機関紙（誌）

仏立宗の定期刊行物の中には、仏立新聞と大放光、それに準機関誌として、泉の光があります。それぞれ、所属寺院から、一般信徒宅に配達されるシステムになっていますので、この中継ぎも役中の大事なご奉公です。

お互いに仕事におわれて、じっくり本を読むというゆとりを失なっています。そこで、お助の席を活用して、さわりの部分を読んできかせてあげるとか、お講の度ごとに、輪読をするなど、良い習慣をつけたいものです。

私達も、半ば登った道を途中から引返して、足弱の初心者のために、初めから登りなおしてみせる親切が人を相手のご奉公の基本なのです。これをまずしっかりと身につけるのが役中の修行と心得て下さい。

この三紙は、すべて信者のためのものですから、受持ち信者の中に、すばらしい信仰体験を持った方や、ご利益をいただいた人があったら、どんな文章でも結構ですから、まとめて、送るようにしてください。

お講師や、お導師に代筆をしていただくのも結構です。

又、下種結縁のため、宗外者に見せてあげることも、大変効果があります。

## （ご）披露

お寺側の方針なり、企画なりを信者さんによく心得てもらうために文書や口頭でご披露を行うわけですが、文書をわざわざ発行するのはある程度以上の大寺院でしょうが、それでも末端まで及ぼすには、やはり口頭によるご披露は大切です。文書というものは、上手に出来てはいても、表情がなく冷たいもので、なんといいっても親しく人間同士が心を通わすところに口頭ご披露の良さがあります。

いずれにしても、まず原稿をつくらねばなりません。

ご披露は、過去または現在進行中の「報告」か、未来の「予告」かのどちらかですが、

- ①いつ（日時）
- ②どこで（場所）

③だれが（当事者、参加者）  
④何をするか（したのか）―事柄  
という四つの要素をはっきりさせなくてはなりません。

そして、内容の骨子である④何をさせる、何をしてほしいのか―の項目はさらに、

- (A)何のために（目的）
- (B)なぜ（理由）
- (C)どのようにして（手段）

に分けて説明を必要とする場合があります。

これらは新聞記事などで五つのW（①②③④）といわれることで、わざわざ言わなくても、お互いにわかっていることは省略します。

以上の7項目の外のことは言う必要はありません。自分が知っていることはツイ余計なことを言って誤解を招くことがありますから注意大切に。

作った原稿は5回以上よく読んで、余計な言葉や足りない言葉を削除し、半ば暗記しておき

ます。ブツケ本番だと朗読調となり、暖か味や誠意が感じられなくなります。

七分三分に人々の顔を見ながら、ハッキリと話します。

天井や床などを見つめながら話すと、憶病な、

無責任な感じを与えます。

とにかく「知らせる、わからせる」ことが目的であることを忘れないように。ですから「ご質問はありませんか」と念を押せばなお結構なのです。

## 宗歌レコードと

### 仏立讃歌集について

仏立宗には、古賀政男先生の作曲による宗歌をはじめ、三祖の讃仰歌や、ご教歌にメロディをつけたものなど、沢山の宗門の歌があります。

この中から、宗歌と三祖の讃仰歌を友竹正則氏が歌って、一枚のレコードを作りました。又、その全てを、仏立讃歌集という美麗な本にして刊行いたしました。

仏立宗徒となれば、宗歌は当然のこととして、三祖の讃仰歌ぐらひは覚えておきたいものです。我々の世代と違つて、現代子は、小学校高学年

になれば、ほとんどが自由に楽譜を読みます。

子供をあつめて、ほんの少し、音楽の判る指導者がいれば、どの寺院にも立派な合唱団ができます。汚れを知らない、子供達が美しい声で宗門の歌を合唱してくれた後で、ご法門を聴問させていただいたら、どんなにか心を洗われる思いがすることでしょうか。

そういう夢を育ててくれるレコードと讃歌集です。レコードは千円、讃歌集は七百元です。申しこみは、本庁弘通局。

## 将 引

信者同士がお参詣に、声をかけ、さそいます。め、連れ出すことを将引と申します。法華経隨喜功德品の言葉ですから普通の辞典にはありません。

こういう熟語は当用漢字でもありませんから、「如説修行」とか「道場」という言葉と同じく、なまじ現代語に言い換えをしないでそのまま使う方がよいのです。

さて、本文には

『もし一人を勧めて将引して法華を聴かしむることあつて言はん、此の経（法華経自体を指す）は深妙なり、千万劫にも遇ひ難しと；この人の福報：世々に口のやまひ（病氣）なく；限るべからず』と。参詣しない人をすすめてお寺やお講に連れ出す、なかなか出てこないが、あの手

この手を使い、せつせとお助行に通い『お題目

のお話しはまったくありがたいものです。二度ときくことのできないものです』とすすめる。

全く苦勞の要ることですが、其の功德こそ口の病気をせず、吐く息は清々しく；現身の果報を得る！というのです。お教化して、一応ご本尊を奉安したが、参詣をさせるのは「育成」で、まさに第二の教化というほど骨が折れることもあります。この功德を『福報不可限』と説かれたのはむべなるかなです。

班長の役務は以前には将引係といって、連れ出しが専門なのです。本命がこの将引で、単なる集金係や宣伝係ではありません。

育成は、自分でお看経ができるようになって「へその緒が切れ」、自分から参詣できるようになって「乳ばなれ」となるのです。

## 助行

信心につくことはついたらけれども、おがみ方がわからないという人がいます。心には申し訳なく思いながら、ついつい信心を怠けている人もいます。又病氣や家庭の不幸にまけてしまつて、腰をすえてすっかりお看経のできなくなっている人もあります。

そうした家庭にでむいていって、共に口唱をし、信心の筋道を教えてあげることをお助行といい、当宗の大事な修行の一つになっています。助行というのは、正行に対する言葉ですから、もともとは、信者宅巡回にだけ使われたものではありません。たとえば、日々のお看経を例にとれば、正行はお題目口唱、助行は、妙講一座の拝読というように用いられてきました。

しかしながら、日扇上人が、本門仏立宗を興されて、時を経るにつれて、ほとんどのご信者が、正行と助行の違い目が判るようになってきました。ところが、お互いご信者は、迷いその

ものの凡夫であるうえ、末法という誘惑の多い時代に生を受けているので、昨日の強信者が、今日は謗法人と変らないなさけない考え方を持つような有様で、一時も目を離せません。

そこで日扇上人は、お助行という漸新な制度を工夫され、前述のような問題のある家庭も、役中宅も、たえず信者が巡回交流し、共に信心をみがきあうように、熱心に教育をされました。ですから、現在、お助行といえは、それは教務や信者が、信者宅で行なう、信心の励まし運動をさしているのです。

一般の宗旨では、僧侶はお寺にでんと腰をすえていて、求めてくるもののみ、教えを説いてきかせます。ところが、当宗は日蓮大士が理想とされたように、教務も信者も、街中でて人々と悩み苦しみを合ちあつて、共に成長しようとしているのです。ここに民衆のための仏教を標榜する仏立宗の一大特色があるので、役中たるものは卒先してお助行に励みましょう。

## 事務会計について

お寺のもつ縦横の組織を運営して行く上で、色々な事務処理が興つて来ます。その事務の内容は、組織の規模、歴史、ご奉公内容等で万差があります。しかし、いずれにしてもお寺がよりよく運営管理され、信心をする人が一層功德が積める様に必要なご奉公です。

事務ご奉公の内容には、公示する事、伝達する事、計算する事、記録する事、集配に関する事等色々あります。さて事務のご奉公を上手にして行く為には、それぞれのご奉公内容の把握も大切な事ですが、もっと大切な事は、事務ご奉公をして頂ける人を一人でも多く作る事が大切です。私達は老少不定です。一人で事務を抱え込んでしまつて、後任を託する努力もせず、イソガシイとグチを云ついても駄目です。多くの人が参加させて頂きご奉公分担をきめ責任を分かちあつてご弘通ご奉公をすると云う事は大切な姿勢です。

上部の役員も、下部組織の役員も、事務のご奉公をご法様へのお手伝いと云う気持ちで受取らせて頂き、功德をつむ事が大切です。

この他、連合（教区）や組（部）における同種のご奉公も、又重要です。お寺のご奉公にくらべると地味で、あつかう金高やその他のものがぐんと少なくなるので、とかく軽く考えられ勝ちですが、これは大変なあやまりです。

信心をやめる人の理由の第一は、組役員とのいざござ、金銭的な不満（ご有志等の説明がうまく徹底せず、強制的にとられる感じがする）ということですから、いささかも油断はなりません。

なにによらず、人のいやがること、面倒くさいことをすんでさせていただくのが、修行で、そういう修行にこそ、大利益があるのですから、諸事お導師に相談申しあげ、役中となつたら金銭の出納簿位は、正しくつけられるよう勉強してください。

## 社会奉仕と信徒

近ごろはもう古くからのPTAや、婦人団体、消費者運動、ボランティア活動、やや政治的になった地域住民運動などが盛んになり、信徒として、組(部)や班、教区という教団組織のご奉公の外に、好むといなどにかかわらず社会活動に参加する機会が多くなりました。団体活動に参加すれば、必ずその一員としての義務があり、ご奉公とのかね合わせが問題になってきます。

この場合、私たちは宗門人(信徒)であると同時に「よき社会人」でなくてはなりませんから参加した以上は誠意をもって尽くすべきです。ご教歌に

『あの人は信者でありしひとのため  
手本となりて名で教化せよ』

## 役務ご奉公の心得

ご教歌

むかしより味方のころそろはずに

軍に勝し事はあらしな

もしも人間が一人づつバラバラに住んでいたら、人類が今日の文明を作り上げることはできなかったにちがいありません。文明は他人の発見や発明を利用して、自分がさらにそれを改良発展させるといふ積み重ねによってでき上るものです。一人の人間のできることはたかのしれたもので、私達の生活の仕事も、すべて人々との共同、あるいは協力によってできるのです。一人で田を作って米をとり、畠を耕して野菜を植え、海に行つて魚をとり、羊を刈つて洋服をつくり：ということができずはありませぬ。ご弘通ご奉公という、我身を含めての大救済

とあります。つまり「常に教化、ご弘通の思いを忘れず」にです。

社会活動をしていれば、当然いろいろな人々と接触し、お教化のたねにも恵まれるはずですが、この筋さえ一本通しておけば、何をしても功德化してくるものです。ご教歌には、

『信心をすすめんと思ふ心こそ

そこが功德のわく(涌く)処なれ』

『世の中のむだなはなしをする時も

それを教化の手がかりとせよ』

たねがみつかつて、自分では言いにくい場合は同信の仲間にも紹介して折伏をたのめば、たとえ自分が直接教化できなくとも、その功德は頂けるのです。

また、こういう活動の体験は、いつかはご奉公に役立たせようという心がけが大切です。

事業も一人づつ単独のご奉公ではなく、団体行動であつて、信者さん同志の分担と協力が必要です。ですから当宗の信者は「班」とか「教区」という組織があつて、これに所属する一員になつて、団体的、組織的ご奉公を分担します。一般に信心修行とは他人とは関係なく、一人で自由に神仏に詣で、教会に参り、祈りをささげ、説教をきき、精神を修養する一という個人的なものと思われていますが、本門法華経に依る当宗の修行は、いつも「他人と共に一つの目標に向つて、はげまし合い、助け合つて励む」という、団体的な点が大いに違うのです。この、「自分が修行する」面と「他と共に修行する」面とが一つに融け合うところが法華経の極意なのです。

この御教歌は「世の人々のためご法のおん為に」といふ一つ心に、つまり仏祖のみ心に合わせご奉公してはじめてご弘通ご奉公を成就し、我身の成仏が得られる。たとえ身分や立場はち

がっても、皆が分（ぶん）に応じたご奉公に喜んでほげみなさい」とのみ意です。くれぐれも

自分のご奉公が他人と密接に関連していることを忘れてはなりません。

## 結婚仲介

受持信者から信頼されて、よろづ相談所のようになることができたなら、役中のご奉公は万点です。

なかでも、結婚仲介は、当事者からも喜ばれ、又、教化に結びつくなど、役中として忘れてはならない事です。仏立婦人会では、東西に結婚相談部を持っておりますし、弘通区寺院でも活発に運動している所があります。

受持信者の中に概当者がいたら、積極的に紹介をしてあげましょう。

初婚者ばかりでなく、配偶者に離別したり、死別されたりした人も、その対象です。特に中高年にとっては、他の全てに勝って、結婚問題はむずかしく、よほどの篤志家でもなければ、真険に問題にしてくれません。私たちは、菩薩行を教えられているのですから、人生の陽のあたらぬ場所にむかって、つき進んでいく心構えが大事です。

## ご奉公の戒め

ご教歌

願くはつかひ給はれ奉公を

するなんといふ身分ではなし

ご奉公というものは貴びかしこんで、喜んでするとおに意味があります。ですからただ「奉公」とはいわず「御」の字をつけて尊び「する」とはいわず「させていただく」と申します。この言葉づかいを、コンチワ、オハヨウのようになら、ただ口ぐせのように使って、気がこもらないとご奉公について文句や不平や悪口やぐちをこぼしせつかくのご奉公が実になりません。

だいたいご奉公とは、信心修行とは私達の苦しみのもとである罪障を消滅する為に、そして幸せのもとである功德を身につける、いわば大きな「もうけ仕事」であることを常々忘れてはならないのです。そして大切なことは、この仕事の報酬の多少は、世間の仕事とはまったく違

い、仕事の量ではなくて、むしろ「喜んでするかどうか」という、私達の心がまえと態度とによって左右されるのだということです。

ですから多忙な人や、身体の弱い人でも、「なんとかして、少しでも」とすすんでさせてください。ただご奉公は格別に尊いものなのです。

法華経の教えは、要するにこのようなご奉公によってこそ、誰彼なく成仏まぢがいなしと説かれたものです。これを読みとることを法華経の「身誦」と申します。法華経は多くの坊様や学者が、いろいろに読んで解釈をしましたが、高祖大士だけが、み仏の思召しどおりに身誦されて、私達にお手本を示してくださいされたのです。

ご教歌

人にさせせぬをとくかとおもひしに

おのが果報をへらす損あり

何人かが協同して仕事をするとき、その仲間うちに必ずといってよいほど一人や二人の横着者がいて、自分の分まで他人にさせたり、先

輩であることを笠にきて他人におしつたりすることが目につきます。それで仕事をしなくてすめば、得をしたと思っっているのでしょうか。しかし本当は当人の錯覚で、はたの眼はフシ穴ではないのですから、こんな横着を見逃がすはずはありません。こうして「横着者」というレッテルを貼られれば、信用や好意が失われ大きな損となることは火を見るより明らかなことです。わかっているのだが、つい横着のくせが出るのは罪障のせい、まったく情ないことです。世間の仕事の場合とはまかくとして、ご奉公というものはすべてお見通しのご法様のおん前でさせていただくことですから、横着をすると、忽ちそれだけの功德は消え、果報を失います。特別にお寺のご奉公ではお互にご奉公の徳をいただくために出かけて来てそれだけの時間をかけるのですから、横着が目についた時（ことに時間にもルーズな点など）は折伏を励行することがかんじんです。

## 金銭の貸借と信徒

信徒間の金銭の貸借は開導聖人のご指南により法度（禁制）となつています。ご教歌には

「かりますとかへされませぬかしますと

かへさしませぬかねのかしかり」

とあるとおり、信者同士だからという甘えから、借りた金はなかなか返せない、貸した金は返らない、催促もしにくく、裁判にかけるわけにもいかない、それが反目となり、お互いに信心を失い、組（部）内の異体同心を破るようになる、結局両方とも地獄行き、これでは信心をすの意味がなくなりませぬ。

金銭の貸借はそのための機関（銀行、質店など）があるのですから、商行為としてすべきです。

これは人情がからみますからむずかしいこと

### ご教歌

ほねをしみすこい事して報はぬと

思ふは因果しらぬものなり

役中さんのご奉公で陥りやすい穴は、自己流のりくつで考えて、ご奉公の手を抜くことです。最初は、何か自分の用事のついでにご奉公をする、子供や使用人にさせたり、参詣券を一人で何枚も入れたりということから、だんだんごまかしやうが多くなってくる。これでは中味の無いハリコご奉公で、頂くご利益の方もちようど中味の無いヌケガラになってしまふ。お役のご奉公をさせて頂く者はそういう因果の道理をわきまえねばなりません。「お役」というものは重くても軽くても、上でも下でも、単なる容器にすぎないものです。その器に盛る功德は私達のやり方、心がまえ如何によることを心得ることが大切です。どうせ頂いた器なら、精一杯の功德を盛るよう、誠実なご奉公を心がけましよう。

で、いい人とか、お人よしと思われている人は、心を鬼にして（実は菩薩にして）『禁じられているから貸す事はできない。そのための信心だから、改良してしっかりおすがりしなさい。私もお助行をしますから』と励ますことが肝心。一時は恨まれても、お計いが頂けます。どうしても断りきれない場合はいくらかでもあげてしまふ（布施）方がよいので、このときも折伏が肝心です。

当宗の信行は単独ではなく、班や組（部）、教区：という組織をつくり、異体同心の助け合いの人間関係を結んでゆきますが、修行なので「甘え」が禁物、「不貸借戒」を守りましよう。

## 現金のお盛り物

お講やご回向など法要の場合に、参詣する人がお金をご宝前に供えることがあります。相当に広く行われている風習らしく、お講師方も黙認している場合がありますが、これはお互いにこの際断然やめるべきだと思います。お盛り物は原則として食べ物に限るのです。たとえ「お盛物」と書いても、現金をご宝前にお供えするのは不適當です。

現金を持つてくる人達の気持としては、ご宝前に供えるのではなく、当然その家の人に対して贈答をする意味でしょう。それならなにもおもりものとせず、直接に渡せばよいのです。このような個人の義理の贈答にご宝前を利用してはいけません。年忌の法要とか祝い事の場合の「御香料」「御祝儀」など、世間の習慣による贈

答のほかはやたらにお講席や法要に現金を贈答することは廃止すべきです。

また現金以外の、世間のいわゆる「積み物」はおもりのとは区別すべきで、どうしても飾る必要があるれば、わきの方へ台でも置いてするように。

厳密に言えばお盛り物としてご宝前にあがつたものはご法様のものとなり、席主のものでも、もちろん供えた人のものでなくなりません。ですから法要をつとめた導師に持ち帰っていただくのが本當なのです。意外に思う方もありますが、これは法華経本門の教義からそうなるのです。

以上はお講席や法要をご弘通のおん為により正しく清らかなものにするためにのべました。

## 酒と信徒

酒は人類の歴史とともに古く、およそ人間のいる所に酒はつきものです。喜びにつけ、悲しみにつけ、酒がなくてはかっこうがつかない。「おみきあがらぬ神はない」というように、神様もお酒を好まれるらしい。それはつまり人間がつくった神なのですから……。

ところで当宗では信者の集まる機会が多いだけに、酒が問題となることもあります。

そもそも仏教では戒律が厳格です。その基本となる五戒の中に「不飲酒戒」があります。仏さまご在世の頃から、多くの仏弟子の中には、酒で過ちを犯し、失敗した人がいたのでしよう。それでご教歌には、

「酒のめば心みだるる物故に　のむなと仏教へ給へり」

とあり、お祖師さまは

「五には酒をのまざる戒、ひがごと（悪事）を制するなり。薬酒は用ゆべし」

と仰せで、酒そのものは善でも悪でもない、人

の飲み方、心がけが問題なのです。世間でも「初めに人は酒を飲む、中ごろ酒が酒を飲む、終りに酒が人を飲む」と言って戒めているように、酒にのまれてしまつて他人に迷惑をかけ、人に軽べつされたりしては、罪障をつくる（ひがごと）になります。

薬酒とは、医薬の乏しかったころ、酒は百薬の長とて、薬用にされたからです。現代でも健康にプラスになる場合があります。なかなかむずかしい、微妙な問題ですが、酒気帯び運転などは絶対しないように……。

次のご指南（しなん開導聖人のみ教え）を味わってください。

「信者は酒をあまり飲まぬよう、飲めぬ酒ならけいこせぬよう、飲める酒ならこれをつつしめ、今度の信行を大事と思はば、なか耐えしのばざらん」

「酒を飲むなどは申さざれども、謗法人のねらふすきまを用心せよのご指南なり」

お寺などの、ご奉公のあとの一ぱい、お礼お講や年回などの一ぱい、特にご宝前ではくれぐれも注意を……。

## 役務勇退の心得

ご教歌

辞職して楽隠居する思ひなし

生々世々の軍(いくさ)萬年

後続者が新任されていままでつとめたお役を勇退したときは感無量なるものがあるうと思いますが、そのときの心がまえをお示しいただいたのがこのご教歌です。

お役を退いても、休んでなんかいられようか  
一との決定をうながしておられます。それはいくさがまだ終わっていないからです。

この軍は「ご弘通のいくさ」で二つの面があります。

一つは「自行」であって、自分自身の、罪障消滅のたたかいです。短い一生のうち、過去世から背負ってきた罪障をできるだけ消滅させていたただかなくてはならない私達の身の上を思

えば、もうこれでよいなどとはとてもいえません。年をとればさが短いのですから、気持ちの上ではなお一層の奮発をせねばならない面があります。寿命が尽きて倒れるのなら、ご奉公の途中で帰寂することを軍人が戦場で倒れるように最も立派な死に方と覚った立場です。

もう一つは「化他」で、外に向ってお題目を一人でも多くの人にすすめ、一刻も早くお祖師様の大理想「一天四海皆帰妙法」を達成せんと  
の悲願を思えば、自分一人ぐらいお休みにしても……とはとても言っていられません。

「お役」が何であれ、この二つの面は、お役以前の、信者としての信行ご奉公なのです。「お役」だけがご奉公ではありません。また、大きなお役、重いお役をつとめたら、また小さいお役、軽いお役をご奉公して、精いっぱいのところまで精進するのが信者の心意気です。

勇退したときにその人の本当の信心前がみえ、これまでのご奉公の功德が生きてくるのです。

## 誕生カード

本年から、仏立信者の家庭にお子さまが誕生すると、ご講有のサイン入りの「お祝いカード」が、宗務本庁からいただけることになりました。それが誕生カードです。赤ちゃんの生れた時は、夫婦はもとより、両親親族まで、狂喜するので、四、五年もするとケロッと忘れて、わがままが出、喧嘩口論、離婚など脱線するのが、現代人です。そこで、誕生の時に、夫婦双方が信心改良をし、子の親として恥かしくない生き方をご宝前にお約束することが大事になります。ご信心の心で送られる、誕生カードは、きつとそういう役割を果してくれましょう。受持信者の中に、お子さまを授かった夫婦ができたら、役中は、お講師、お導師にお話をし、誕生カードを受与していただくご奉公をしてください。

二、三年さかのぼって、幼児を持つご両親に差しあげるのも結構ですし、「ふれあい」のために利用することもできるでしょう。カードの中に、ご両親が、子供を持った時に感じる、一生の夢が、美しい詩になって、のせられていきます。

## 法灯相続用テープについて

小さなころから両親につれられて、お寺参詣をしている内に、気がついたら信者になっていったというのが、二代目信者の大方の告白です。宗門では、幼小期にお寺と親密になれるよう薫化会という教養部門を作り、各寺院に結成を命じています。

しかしながら、寺の大小や、指導者の有無によって、薫化会がなかったり、あっても充分活動をしていない所があります。

そこで、家庭で、信心教育をしようとして、本年、法燈相続用のテープを作り、寺院一巻ずつ贈呈をしました。これには、三祖のお話や、仏教童話等が、専門家の手によって録音されています。又子供向けの、宗門の歌も収められています。

お寺からおかりをするなり、再録音するなどして、受持信者宅のお子さんに聞かしてあげるようにしてください。

子供は宗門の宝です。子供を大事にしない会社や組織はかならず衰微します。

## 役務と功德

ご教歌

寂光で楽隠居することろなし

娑婆の修行が眞の法楽

現在のお役に不満をもつ方があるかもしれせん。そこで信者にとって「お役」とは何かーということを考えましょう。

ご奉公には二つの面があります。それは「役務」と「修行」で、この二つはちようど容器いれものと中味との関係にあり、お役という容器に、修行の功德という中味を盛るのです。お役は教区や部（組）という組織の中で他の信者のため役立つ立場でそのご奉公の心がまえとやり方の如何によつて盛りこむ修行の功德が左右されます。私達にとって問題なのは中味の功德です。容器も大きいからよいというものではありません。分

相應の大きさの容器で、セッセと功德の水を汲むがよろしい。容れ物の「お役」の大きさにこだわって、大事な修行の功德を汲みそこねないようにしてください。

このご教歌は、ご奉公の功德で寂光参拝をさせていただいても、またすぐ此世にかえつて来て、またはじめからご奉公をする、その苦勞の中に味わう幸福こそ本物なのですーという、本門法華經の教えの極意、信者の人生觀を示されたので、ご奉公の妙味がわかれば、もうお役などは、其の時其の場の必要に依じて、何でも結構ーということになります。まったくの話「お教化」「お助行」「将引」「参詣」「ご有志」などのご奉公はお役に関係なく、信者としての修行です。教区長、部（組）長の任期を終えたら、どうぞ班長のお役をつとめることに誇りをもってください。世間では社長をやった人を平社員にはできませんが、信行の世界は全く別であることを知ってください。

## 授級褒賞

宗門では開講百年（昭和31年）より、5ヶ年毎に区切つて、左のごとく信徒各位の法勞功德の点数をとり、授級表彰を行っています。

昭和54年12月31日までに昭和50年1月1日からの採点を計算して、翌年3月31日までに上甲をしますと、本山高祖会に第五回授級表彰が行われます。

項目

- ①教化：教化子が常講をつとめる場合に一戸につき3点（教化だけは前年12月1日より54年11月30日まで）
- ②助行：一年間で120回（以上は何回しても1点）
- ③役務：寺務局長13点

連合（教区）長、部（組）長 2点  
寺務局幹部、各会長 2点  
弘通区参与、宗会議員 2点

以上の二役の合計点数

④金品有志 5ヶ年間合計3万円につき1点  
（品物は金額に換算して）

⑤常講勤修 1年間1点

授級

- 一級は「法勲」号、功勞章と賞状
- 二、三級は「講勲」号、功勞章と賞状
- 四、五級は「教勲」号、功勞章と賞状
- 六、七級は記念章と賞状
- 八、九、十級は賞状

（五級以上は本庁、六級以下は弘通区の審査に抛る）

五級以上の授級者の妻には内助の功を讃えて「浄勲」号がつけます。

なお、はじめ10点で十級、以後六級まで、各級15点、四級までは20点づつ、二級までは25点

つつ、さらに30点で一級、はじめての点数はいくら多くても五級が限度です。以上は、凡夫のわれわれが信行増進の為の目安として、はげみ

にするための制度です。本当の点数はご法さまがつけてくださるので、内容のある、真心のこもった信行ご奉公こそ大切です。

### ☆これだけは読んでおきたい 仏立宗の刊行物

宗徒教範	宗義編Ⅰ～Ⅱ	教育院
実践編Ⅰ～Ⅲ		
類別祖書要録	上・下	教育院
仏立宗綱要		教育院
日扇聖人全集	日扇聖人全集刊行会	
仏立教学撰集	野口先生の部	教育院
観心本尊抄見聞		教育院
妙講一座略講		弘通局
仏立新聞	弘通局(仏立新聞)	
仏立聖典		大放光
ご教歌事典		大放光
ご法門用語事典		大放光

大放光	
信行読本	
説得の類別	
観心本尊抄	
仏立開導長松日扇	
妙法蓮華経	
ころろの財	
仏立婦人ハンドブック	
これからの薫化会	
仏立青年入門	
泉の光	
仏立開講百年史	
宗務本庁	
大放光	
大放光	
大放光	
泉日恒	
村上重良	
指田日帆	
福岡良樹	
婦人会	
薫化会	
青年会	
乗泉寺	
宗務本庁	

まだまだ沢山ありますが、紙数の関係で、省略します。このほとんどは、宗務本庁で買わしただけのものですが。

## 本山と由緒寺院

宗法第二章第九条「本山有清寺は本宗唯一の本山、根本道場であつて、弘教宣布の中核である」とあり、また宗令第三章第一節に「本宗は京都市誕生寺、京都市長松寺、大津市仏立寺及び守口義天寺を由緒寺院とする」と規定されています。概略を述べますと――

本山有清寺(本門仏立山) 根本道場

所在地 京都市上京区一条通七本松西入る滝ヶ鼻町一〇〇五一

本山というのは、その意味内容は各宗派によりいろいろで、いくつもの本山を立てているものもあります。当宗では、発祥の地であるという由緒、宗の総導師である講有上人が止住され、宗務本庁という宗団運営の中央府がおかれ

である故に有清寺は本山とあがめられています。

歴代講有上人は宗務本庁の総裁と同時に本山有清寺の住職とを兼摂しておられます。本山の護持と、中央政府としての宗務本庁の財源として全国二六〇ヶ寺の末寺信徒が年初の初灯明料、7月の本山総回向料、10月に本山高祖会奉納金を奉納させていただくのです。これらは教講一体の厳正な監査のもとで弘通の為に使われます。創立は延慶元年(一三〇八)4月8日、高祖滅後26年、開基は十八中老の一、日弁上人で、京都弘通の日像上人の妙顕寺創立よりも古いのです。当時は青柳厨子本門寺と称しました。ご本尊は日弁上人が上総鷲山寺から移された弘安2年の高祖ご真筆の、一遍首題(お題目だけ認められた)のご本尊を中老日法上人が浮彫りにされたご本尊といわれます。

霊像(ご尊像)は一木三体、高祖手自開眼霊像として、弘安2年日法上人が一木の木材から三体を彫刻され、高祖自ら開眼なされて三本門

寺にありといわれる霊像です。他の二体は池上本門寺と富士本門寺でもとは極彩色であったそうですが、開導上人がお入りになったときには、六百年の年月で真黒になり、お笏(しゃく)も傾いていた。その古くなつたままのお姿をそのままにいただいているのが信者の拝授するご尊像なのです。



京都駅前より市バス⑤衣笠行乗車、北野神社前下車(本山宥清寺前)

以上のご本尊と霊像は現在宝蔵にご遷坐されており、本堂に奉安されているのは宥清寺と別棟の旧「親会場」のご宝前を奉遷したのです。

宥清寺は鷺山寺の末寺本門寺として二条に創立されてから応仁の乱で丹波亀山へ移り、京都近衛通りに戻り、小川木挽町に移り、天正年間に妙蓮寺の末寺となり、御前通り下ノ森下ルに移り、ここで宥清寺と称しました。

開導聖人が本門法華宗からその宥清寺を借受けて入られたのは大津法難直後の明治2年で、当時の有様は

「清風ここにすみそめし時は豆腐屋がとうふ一丁かしてくれず、畳は朽ちて合せ目より薄竹はへたり」と仰せのような荒廃ぶりでしたが、やがて「世間にては宥清寺は貧乏寺にて、これまで豆腐一つかけ売にてせぬ処を、日々材木をはこびにぎにぎしく人大勢入り込みくらしをり候。故に近所の面々けしからぬ御繁昌と感心せぬ者なく、うらやまぬ者なし。これ全く高祖生身の

御尊像の御はからひと存じありがたき身にあまり候」というふうが発展し、「盗人は頼んでも来てくれず候ひしに、今年は強賊所々の金持の家に入り、物盗り手疵等あふせたり、此金持の数に見こまれたるやうに成りしは御利益也」とあるように強盗に襲われました。被害はほとんど無かつたのですが、そのことを詠まれたのが首題のご教歌です。かくて昭和6年、下の森に根本道場として現在の伽藍が新築落成し、高祖六五〇遠諱が奉修されました。

この建築は、京都小御所を施工した名人の宮大工のご信者、三上吉兵衛氏が耐震耐風千年もつようと、一切釘を使わず仕上げた、昭和の代表的寺院建築です。

誕生寺 (日扇山) 御誕生地道場

所在地 京都市中京区蛸薬師通室町西入る姥柳町二〇七

文化14年4月1日ご生誕の、仏立開導長松清



○京都駅より市バス②②03②06②14に乗車、四条烏丸下車  
○本山宥清寺より北野神社前より市バス②02②04に乗車、烏丸四条にて下車

風日扇聖人のご旧宅地で、明治25年仏立第三世日随上人が止住されたのがはじめとされ、もと誕生地教会と称し昭和18年寺号公称。

仏立寺（長松山）初転法輪道場

所在地 滋賀県大津市追分町六七

文久2年4月、開導聖人のご創建による本宗最初の寺院で、もと大津法華堂と称し明治12年寺号公称。

ここはまた大津法難の聖跡でもあります。この法難明治元年7月29日のことは路上で捕史（当時の警官隊）に逮捕、収監されるというものものしい事件でしたが、この時の京都府知事の公明な裁きによって、無罪とされたばかりでなく、正法ご弘通を公認されて、かえって禍いを転じて福となり、当宗ご弘通の発展の道が開けたのです。

長松寺（無貧山）御隠栖地道場

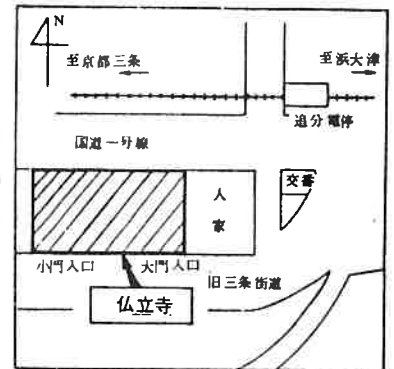
所在地 京都市下京区麩屋町通佛光寺上

明治16年11月26日、開導聖人は高弟現喜師（日聞上人）を第二世に任命され、明くる17年2月当所に移住されました。ご教歌に「寂光で楽隠居するころなし」とて、ますますお弟子信者の育成教導に専念され、重要なご指南書を著してご遷化まで止住されました。ことのほか賞でられたお庭や居室、遺品の数々がそのままに保存されています。

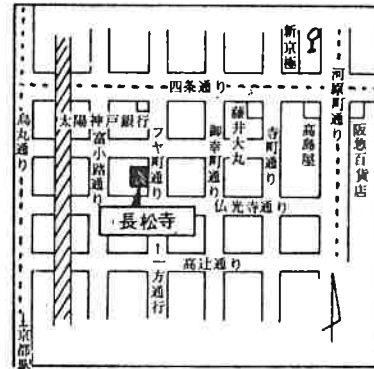
義天寺（鶴林山）御遷化地道場

所在地 大阪府守口市本町一―三八

開導聖人は大阪の代表的信徒であった秦新蔵氏の招請で明治23年7月17日、朝方より淀川を船で大阪へと下る途中、大阪の入口の守口での川辺の茶屋で休けいされましたが、そのまま静かに安らかにご遷化されたのです。（仏立聖典



- 本山宥清寺より市バス⑩に乗車、河原町三條下車、東へ
- 京都駅前より市バス⑤に乗車、三條京阪にて下車
- 三條京阪より京阪電車大津線、準急（石山寺行）に乗車、追分にて下車

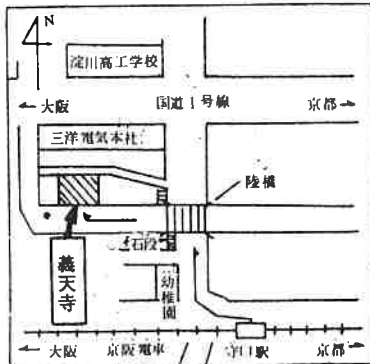


- 京都駅前より市バス④⑭⑳に乗車
- 本山宥清寺よりは北野神社前より⑪⑳に乗車、四條河原町下車

「御遷化略記」または大放光50年1月号付録

「開導の足跡を辿る」参照

明治29年、この茶屋を入手し守口教会としましたが、昭和21年寺号公称。現在は淀川の流路がかわり、川辺ではなくなっています。



- 京都三條又は四條より京阪電車大阪淀屋橋行（急行）に乗車、香里園にて各停に乗換え、守口市駅にて下車

## 法号

信徒が帰寂された場合、当宗の慣例では、死産、流産などは「水子」「水男」「水女」、1・2才まで「嬰子」「嬰女」「孩子」「孩女」、3・10才ぐらいまで「童子」「童女」、これより上は「院号」と「信士」、「信女」で少くとも7字法号がつけます。

院号には第一字に「本」の字にする場合が多く、また男子は「法」、女子は「妙」の字が入ります。

なお、ご信心ぶりやご奉公の経歴などによりさらに「日号」が入り8字法号、さらに「讚歎号」としてその人がらをたたえる、例えば「○徳」というような2字が入り、11字法号になることもあります。

「居士」「大姉」号は、主として役務ご奉公

歴によります。「日号」が入って最低9字、

一級受与では「法勲」、二・三級では「講勲」、四・五級では「教勲」、五級以上の受級者の内助者（原則として本人の妻）には、「浄勲」という「勲号」が院号の下に入ります。（授級褒賞の項参照）

社会的な身分の高い人には「院殿号」、宗門の特別功労者として、講有より「大居士」号をいただいた方もあります。

当宗の法号は、一般にあまりむずかしい文字は使われません。

以上のことは、寺院によって多少のしきたりやちがいがあります。

大切なことは、当宗の法号は、その方の信行ご奉公の功德でつけられるもので、他宗のようにお金で買うものではないことを心得てください。

## 本門仏立宗宗歌

本門仏立宗宗歌

作詞・西条八十

作曲・古賀政男

一

むかしも今も 一すじ燃ゆる  
清くあかるき 御法のともしび  
嵐に消えず 塵に染まず  
大慈悲尊し 久遠の本仏  
末世の闇を 照しかがやく

我等我等

ああ光栄ある仏立教徒

二

蓮・隆・扇の 相つぐ教

たかくかかぐる 我等の宗団

この道ひとつ 世をば救う

誓願尊し 浄仏国土

高祖の徳に 世界をつつまん

讃えなん五字の妙法

我等我等

ああ光栄ある仏立教徒

〔意味〕み仏が法華経を説かれた大むかしから今この現在まで、そのまま少しもかわらず伝えられたお題目様をお唱えして、いつでも何所でも、我等と共におわすみ仏の大慈悲のお守りをいただく、何とかしこくもありがたいわれら仏立教徒の身の上であろうか。

この、高祖日蓮大士から門祖日隆聖人、仏立開導日扇聖人と、そのままに受継がれた、世を救う唯一つの道によって、この世に浄土をうち立てるといふ高祖の誓願の尊さよ。そのみ志を継ぐわれら仏立信徒の使命の、いかに光栄あることよ。

# 仏丸

巧

ついているところもあります。

当宗の紋章は開導日扇聖人がみずから制作された、いわゆる「仏丸」です。一見して簡単なようですが「仏立」の二文字を巧妙に図案化されたもので、正式のものは下図のとおりです。太い線に細い切れ目が入っている場所などなかなか複雑ですから、横写するときはよく注意して下さい。

仏具店などで、マッチやふきんにまで付けていますから粗末にならないように……。

ちなみに、御酒錫（お供酒用の器）には「鶴丸」がついていますが、これはお祖師さまのご紋です。左右で向かい合うようになっています。この他、門祖日隆聖人の「千鳥」のご紋、開導聖人ご自身は「松葉」のご紋なども折にふれ使われます。宗内の寺院によっては「寺紋」を作



## 教区長(連合長)の

### ご奉公の種類について

- 一、お寺との連絡に何と何があるか。
- 二、組(部)との連絡は何をするか。
- 三、毎月教区(連合)内を何回お助行するか。
- 四、教区お講の準備に何をするか。
- 五、組お講の時、貴方は何をするか。
- 六、冠婚葬祭のご奉公に何々があるか。
- 七、教化道場の時何をするか。
- 八、三大会将引に対して何をするか。
- 九、ご本尊奉安の時何をするか。
- 十、諸ご有志に関して何をするか。
- 十一、その他のご奉公に何があるか。

## 組長(部長)の

### ご奉公の種類について

- 一、お寺との連絡に何と何があるか。
- 二、班との連絡は何をするか。
- 三、毎月組内を何回お助行するか。
- 四、教区お講の時、貴方は何をするか。
- 五、組お講の準備に何をするか。
- 六、冠婚葬祭のご奉公に何々があるか。
- 七、教化道場の時何をするか。
- 八、三大会将引に対し何をするか。
- 九、ご本尊奉安の時何をするか。
- 十、諸ご有志に関して何をするか。
- 十一、その他のご奉公に何があるか。

(注) 某寺の役中勉強会のテキストを転載しました。

# 当宗の行事

## 恒例法要

- 1 元旦会
- 2 開講会
- 3 高祖降誕会
- 4 春季彼岸会
- 5 門祖会
- 6 開尊会
- 7 総回向会
- 8 秋季彼岸会
- 9 高祖会
- 10 除夜法会

## 臨時法要

- 1 国家の慶弔に際して行なう法要
- 2 本宗の重大な慶弔に際して行なう法要
- 3 其他仏教徒として行なう行事

# 役中ミニ常識(コラム)目次

仏立宗の信心相承	4
ご本尊の三義	6
法華経の読み方	8
仏立宗の系統図	10
七・五・三の祝	15
三大会の項参照(その一) 日蓮大士の歌	19
三大会の項参照(その二) 門祖様	21
仏前結婚	23
三大会の項参照(その三) 日扇聖人讃歌	25
法灯相統	35
言上文の実例	38
如説抄の唱え方	40
ありがとう一、二、三、四集	51
ご 壮 嚴	54
役中の七ツ道具	64
お数珠のお開眼	66
仏立機関紙(誌)	72
宗歌レコードと仏立讃歌集について	74
結婚 仲介	80
誕生カード・法灯相統用テープについて	87
これだけは読んでおきたい仏立宗の刊行物	90

## 門入中役

発行人・〒602 京都市上京区御前通一条上る  
指田日軌  
編集・本門仏立宗宗務本庁弘通局  
印刷・〒435 浜松市天王町1726  
(有) コスモファンシー